

國語
本語
各課取扱の着眼點

尋常科第六學年

特259

530



始



芦田惠之助著

國語
讀本
各課取扱の着眼點
尋常科第六學年

東京 蘆田書店藏版

特251
530

序

一法究盡は萬法究盡の捷徑である。現代は誰も一物諦視の力が弱くなつたやうだ。左顧右眄過なきを期する所に、大なるつまづきを作つてゐる。一法究盡一物諦視の骨を悟らなかつたら、現代のつまづきはつひに改まる期はあるまい。國語は國民の生命だ。生命は、生命で取扱ふ場合に、その實相に觸れることが出来る。環境整理や原據出典に心を二三にしないで、一心に讀むがよい。そこに自己独自の天地が開けていく。世は何故にこの第一義をよそにして、末梢をのみ追ふのであらうか。

國語讀本の取扱とても、全くこの義に外ならぬ。生命を傾注して讀破考察する所に、その眞義もわかり、取扱の識見もたつ。この意義に於て、この著は或は蛇足かも知れぬ。しかしこの著の大部分は私が過去五年有半の教壇行脚に於て眞劍に考へ、眞劍に取扱つた記録である。同好の士の一笑の資ともならば幸甚。

昭和六年四月十日

芦田惠之助しるす

序

一

凡例

- 一 この書は讀本を精讀して取扱の着眼點が定まつた後に讀んでください。
- 二 教材と題して國語讀本の本文をあげ、所々に脚註を施しておきました。これは私の通讀直後の感で、碧巖や從容錄の着語ちやくごに學んだものです。着語する氣で讀むと、著しく生命の躍動を感じます。蓋し國語教材研究の一生面かと思ひます。
- 三 各課取扱の時間の最少限を配當しておきました。これは復習の時間を多く得たいのと、くどく説いて、兒童の倦怠を招くのをさけたいのと、なほ無記の讀本である萬象や補充文を讀ませたいがためです。感想文を取扱ふ時間は、この配當以外の時間と御承知下さい。
- 四 私の國語教授は音聲によつて、耳よりといふを重んずると同じ程度に文字によつて、手より目よりといふを重く考へてゐます。兒童にも日々十分内外は書かせますが、その時には教師も兒童と共に板書することにしたと思ひます。
- 五 本書の尋常科第一學年の卷に、第一章緒言(その一)として、本書を發行するに至つた事情と私の教材所見を明かにし、第二章緒言(その二)として、私の讀方教授に關する所信を明かにしておきました。併せて約七十頁御一讀を願ひます。

目次

第一章 讀本概観……………	六	第十五課 人と火……………	六
第二章 尋常小學國語讀本 卷十一……………	六	第十六課 無言の行……………	六〇
第一課 太陽……………	二	第十七課 松阪の一夜……………	三〇
第二課 孔子……………	二	第十八課 貨幣……………	一〇三
第三課 上海……………	三	第十九課 我は海の子……………	一〇七
第四課 遠足……………	三	第二十課 遠泳……………	一一二
第五課 のぶ子さんの家……………	三〇	第二十一課 曆の話……………	一一六
第六課 裁判……………	三〇	第二十二課 リンカーンの苦學……………	一二四
第七課 賤嶽の七本槍……………	三〇	第二十三課 南米より……………	一三三
第八課 瀬戸内海……………	三〇	第二十四課 孔明……………	一四〇
第九課 植林……………	三〇	第二十五課 自治の精神……………	一四九
第十課 手紙……………	三〇	第二十六課 ウェリントンと少年……………	一五〇
第十一課 畫師の苦心……………	三〇	第二十七課 ガラス工場……………	一五九
第十二課 ゴム……………	三〇	第二十八課 鐵眼の一切經……………	一六三
第十三課 ふか……………	三〇		
第十四課 北海道……………	三〇		
第三章 尋常小學國語讀本 卷十二……………	六		

第一課	明治天皇御製……………	一五
第二課	出雲大社……………	一六
第三課	チャールズスダーウイン……………	一八
第四課	新聞……………	一八
第五課	蜜柑山……………	一九
第六課	商業……………	二〇
第七課	鎌倉……………	二四
第八課	ヨーロッパの旅……………	二二
第九課	月光の曲……………	二八
第十課	我が國の木材……………	三八
第十一課	十和田湖……………	三四
第十二課	小さなねち……………	三八
第十三課	國旗……………	四六
第十四課	リヤ王物語……………	五二

第十五課	まぐろ網……………	五三
第十六課	鳴門……………	五六
第十七課	間宮林藏……………	七〇
第十八課	法律……………	七六
第十九課	釋迦……………	八〇
第二十課	奈良……………	八九
第二十一課	青の洞門……………	九四
第二十二課	トマス、エヂソン……………	一〇一
第二十三課	電氣の世の中……………	一〇六
第二十四課	舊師に呈す……………	一一一
第二十五課	港入……………	一一四
第二十六課	勝安芳と西郷隆盛……………	一一八
第二十七課	國民性の長所と短所……………	一二六

(をばり)

國語
讀本
各課取扱の着眼點

(尋常科第六學年)

芦田惠之助著

第一章 讀本概観

私が國學院に選科でたゞ一年居た間に、今泉定介先生から教へられたことである。小學校の國語讀本は大學の教科書としても立派なものだ。と。こんなことを先生からきくまでには、いさゝかいきさつがあつたのだ。先生は新井白石の讀史餘論を説いてゐて下さつた。讀史餘論といへば、假名交り文のもので、さして先生から説明をあふがなければならぬものではない。當時私は三十歳ちかくで、何かな先生のなさる事に、文句をいつて見たくてたまらない頃だつたので、今泉先生の讀史餘論を他の書物にかへてもらはうと思つて、級の決議といふので、先生にぶつかつた。すると次の讀史餘論の時間に、先生は苦りきつて、生徒の不所存をたしな

めた上に、吐きだすやうにさきの言をいはれた。當時私は、先生の眞意を解するに、あまりに低級であつた。しかしその低級なことは棚にあげて、今泉先生の法螺は大きい。といつて、冷笑に等しいものを先生に投げた。先生はその後、讀史餘論を諄々として説かれた。引込まれるとはなしに、取込まれて、半年ばかりたつと、面白くてたまらなくなつた。爾來小學校の國語教科書を手にして生きること殆ど三十年、やう／＼今泉先生のお言葉がわかつたやうな氣がし出した。昭和三年からこの書の著作に従事し、尋常一學年用、二學年用、三學年用、四學年用を殆ど同時に發行し、五學年用はずつと遅れて發行し、今―昭和六年四月―また六學年用を發行して、これが完結を見るに至つたが、一課一課を詮議してみても、いよ／＼今泉先生の言の至言であつたことを敬服するに至つた。

傳へきく北海道の札幌にいらつしやる承天老師は、この頃おやすみになる前に必ず讀本一卷づゝお讀みになつて、有難い書だと仰せらるゝとか。老師に讀まれて、はじめて讀本も成佛するのであらう。今泉先生の言といひ、承天老師のお言葉といひ、私どもはその尊いものを尊しと見る眼がぐらくして、知らず／＼大なる罪

ををかせてゐるやうに思ふ。教壇行脚五年有半、十一十二の巻の各課取扱の着眼點を書いて、いよ／＼兩大先覺の兩大至言をありがたく頂くことが出来るやうになつた。

さすがに十一十二の巻を通覽すると、編者がいかなる國民を作らうかと志してゐらるゝかがわかる。十一の巻の第一課に天の太陽をとり、十二の巻の第一課に地の明治天皇の御製をとつた。そこに明るい正しい我等の行くべき道があふが、ゝやうな氣がする。これにつぐに、十一の巻の第二課孔子、十二の巻の第十九課釋迦がとつてある。東洋の二大聖がとつてある。めざすところが道だといふことが知られる。修養をめざしたものでは、十一の巻の第五課のぶ子さんの家、第十、六課の無言の行、第二十四課の孔明、第二十六課のウエリントンと少年、第二十八課の鐵眼の一切經、十二の巻の第十二課小さなねぢ、第二十一課の青の洞門など、天下一品のものばかり。父が我が子を思ふ十一の巻の第十三課ふか、子が我が父を思ふ十二の巻の第十四課リヤ王物語、人は睿智のひらめき、佛性のかゝやきを、いかなる場合にも見出すことが出来ることを物語るものである。一心の定住するところ

ろがきまれば、十一の巻の第二十二課リンカーンの苦學、十二の巻の第三課チャールズダーウィン、第十七課の間宮林蔵、第二十二課のトマス、エヂソンなどがそのまはりをまはつてゐる。さらに人間淨化の義に於て、十一の巻の第十一課畫師の苦心、十二の巻の月光の曲などがあり、求道の義に於て、十一の巻第十七課に松阪の一夜があり、のるかそるかの場合に於て、十一の巻の第七課賤嶽の七本槍と、十二の巻の第二十六課勝安房と西郷隆盛がある。これらをまとめて考へると、如何に自己を育つべきかといふことが明かになる。

社會人の教養としては、貨幣・曆・新聞・商業があり、裁判・自治の精神・法律があり、ゴム・蜜柑山まぐろ網・ガラス工場があり、植林・我が國の木材があり、人と火がある。電氣の世の中もこゝに加はるべきものか。

遠足といひ、遠泳といふ。遊である。小旅行とも考へられる。上海・北海道・出雲・大社・十和田湖、いづれも旅に關係あるもの。南米より、ヨーロッパの旅、いよいよその範圍が大きい。鎌倉・奈良は、追憶によつて意義の加はる土地である。十一の巻十二の巻の韻文中、三つまでが海に關したものであることが面白い。いはく我は

海の子、いはく鳴門、いはく港入、それに瀬戸内海をあはせて見ると、注意を海にむけようとする考が明かに讀まれる。その外十一の巻の手紙、十二の巻の舊師に呈す等は、文體から特殊なものに思はれるが、その内容は松阪の一夜に縁を持つとも考へられる。

國旗があつて、我が國民性の長所短所がある。それ〴〵に相關聯するところがあることを考へると面白い。これだけの教材で、我が少國民を國民たるべく指導するのである。我等はひまあるごとに讀みひたつて、その教材の實體にふれなければならぬ。

第二章 尋常小學國語讀本 卷十一

第一課 太陽 (二時間)

太陽が何だらうかといふことは、人類あつて以來の問題であつたにちがひない。むしろ驚異そのものであつたらうと思ふ。昔の人は何だかわからないが、心から之を禮拜してゐた。尊敬感謝の誠をさへげてゐた。今の人は科學的研究のすんだおかげで、太陽は白熱状態にある一大火球であると教へられ、力の根元、生命の根元と教へられて、なるほどとわかつた氣になつてゐる。わかつたけれども、尊敬感謝の念を忘れてしまつた。人は到底自己以上のことを考へることは出来ない。白熱状態といふが、それが果して地球表面に於ける白熱状態と同一なのだらうか。お安い所でわかつた氣になつて、太陽を單に物として見るのが、人間の幸福だらうか。天上のものを地上に引下すといふのはこの事だ。引下せないものを引下した氣になつて、すましてゐる事はもつたない事だ。危険なことだ。思

想國難の源はこんなところにあるかも知れぬ。金を借りて物を買入れたり、一時支拂つたりする力を與へられた人に對してすら、なほ感謝するのが人の道だと説くではないか。父母祖先に對して、追慕愛敬の誠を盡すのを、萬善の本と説くではないか。その父母祖先をうみ、之を育て、さらに我等に生命を與へた太陽に對して、たゞ物とのみ見てよからうか。私は昔の人が純真な心で、太陽に感謝したその心持がなつかしくてならぬ。この課を取扱ふ者は、まづ太陽に滿腔の感謝を捧ぐべきことを考へて、それからこの文章の取扱にはいるやうにしたい。忘れても天上のものを地上に引下すやうな冒瀆をしてはならぬ。

作者が太陽を大なる力と説き、生命の根元と説き、次に、「一體どんなものだらうか。」といふ疑から、しばらく地上に引下して研究をすゝめ、その地球に比して、容積の三十萬倍の大いさであることから、天上の無数の星に及び、それらの總括したものが宇宙であることから、宏大無邊のものを想像させた所は、頗る意を用ひられたものやうに思ふ。私はこの課を取扱ふ時、必ず戯れて、「これほど大きい電燈を、無料でともしてくれる人があつたら、どれほど人間はその人に感謝するだらう。」といつ

て笑ふ。人は平常のこととして氣にも止めないが、晝間のありがたさを思ふ心から、力の太陽へ、感謝の太陽へ、宇宙の無邊へ、生命の信仰へと導いたらうまく取扱へると思ふ。

私は昭和六年一月元旦の初日の出を東支那海上で拜した。一月十五日新高山上の一點雲なき日の出を拜した。共に心から頭が下つた。日々の朝日夕日に感謝することを忘れてはならぬ。

第一時には全文通讀、次に物として測定した太陽、観測した太陽を考へさせ、一體どんなものであらう。」といふ疑問を解決したい。聽寫は第一段全文と第二第三段の傍線を施した重要語句を書かせたい。立言の雄大と生命の根元を考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第四段の宇宙の驚異に關する部分と、法の嚴然たる部分とを書かせ、宇宙の大を考へさせたい。もし餘力あらば、太陽系—太陽を中心としてまはる八遊星、即ち水星(八十七日)金星(二百二十五日)地球(三百六十五日餘)火星(六百八十七日)木星(十一年と三百十四日餘)土星(二十九年と百六十

七日)天王星(八十四年)海王星(百六十五年)のことを語つてきかせ、かうした太陽系のやうなものが無數にある事を考へさせて、いかに宇宙の大なるものであるかを思はせたい。

なほこの大宇宙が糸亂れぬ法則によつて流轉し、大なる一つの生命として考へることの出来ることから、我も亦宇宙の一存在であることに及び、太陽は太陽としてその功徳をほこるでもなく、一日その勞をくやむでもない。我のみ執着つよく、利害得失の念つよし。耻づべきことのやうなりと考へる時、人生は至極明るいものとなるやうである。

教材

地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。(立言) 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論あらゆる生物、一として生存することは出来ぬ。(生命の根元) これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。(當然の疑問) 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。(推定) さうして其のさしわたしは三十五

萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。温度は表面で約六千度、内部に入るに隨つて益々高い。光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。(物の測定)

望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、光の強い部分もあれば弱い部分もあり、又所々に黒點といつて黒く見える所もある。此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。(観測の結果)

ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。(異)つまり此の宇宙には、あの太陽のほかにも、これと同じやうなものがなほ數限りもなく存在してゐるが、(宇宙の大)たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。(大然)しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。今かりに一時間五十

里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かかるのである。(光年を思ふがよい八十
七年はあまりに近い)

第二課 孔子 (四時間)

この課は十二卷の釋迦と好一對の難課である。第一段に孔子の略傳を叙し、二段に論語、三段四段五段六段に論語中の語を引いて、孔子の性格を明かにしてゐる。取扱つてみて困難なのは、傳の中にしつくりその語をおちつけることである。

孔子は支那幾千年の人物中に於ける第一人者である。その第一人者たる所以は、何處にあるだらうか。要するに道を求め、道を行じたといふ外には何もありません。道を求め、道を行ずるといふことはむづかしいことだらうか。むづかしいといふのは既に不純で、平常心が道である。孔子とてもその爲政第四章に、「吾十有五にして學に志す、三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従ひても矩を踰えず。」といはれ

たやうに、生れながらにして、聖人でもあつたらうけれども、修養によつて、自己を完成せられたことはたしかである。我等はその足形をたづねて、道を求め、道を行ずるたよりとするのである。

この課を取扱ふ着眼點は、第一段の略歴によつて、七十三年の孔子の全生活をうかがはせ、次に論語から引用した金言によつて、さらにそれを明かにするのが眼目である。

第一時には全文通讀、次に第一段が五小段に分れることを考へさせたい。――孔子の人物概評、少時好學、魯に於ける孔子、流浪生活、それから老後の生活である。そのうち最も光つてゐる孔子の生活は、六十八歳の時衛より魯に歸られた後で、教育と著述に力を用ひられた時である。その翌年顔回(三十二)と子伯魚が歿した。孔子の痛歎愛惜が思はれる。

第二時は全文通讀、前回の復習、それに論語と正義の念のつよき所、中正不偏と好學の念の深き所を取扱ふ。論語の言葉全部を書かせたい。而して傳中に位置せしめたい。

第三時には全文の通讀、前回の復習、それについて五段と六段のことは全部を書かせて、傳中に位置せしむること前と同じである。

第四時には全文總復習として、傳中にしつくりと言葉を落付けたい。意義の補説の足らぬ所などを十分に説きたい。

參考

孔子名は丘、字は仲尼、その先は宋人、父は叔梁紇、母は顔氏、周の靈王の二十一年十一月四日――綏靖天皇の三十一年皇紀百十年――魯の昌平郷に生る。十五にして學に志し、三十にして立つとあるから、修行十五年にして、一家の識見を有するやうになつたとの意であらう。その間に季氏の庫役人となり、また牧畜の役人となられて、いかなる賤職にも忠實に働かれたから、その成績がきはめて立派だつた。その後齊にゆきて用ひられず、魯に歸つて始めて中都の宰となられたのが、四十七歳の時である。大司寇となつて、相の事を攝行せられたのが五十二歳、魯の定公を相けて、齊の景公と爽谷に會し、景公をして、魯は君子の道を以てその君を輔くるに、子は獨夷狄の道を以て寡人に教ふ。」と歎せしめたのはこの時の事

である。齊魯をおそるゝのあまり、女樂をおくつた。季桓子これをうけて政を聽かず。なほ孔子に對して、季桓子の非禮なることが多かつたから、孔子は終に魯を去られた。五十五歳から流浪の旅に出で、衛宋陳蔡葉とめぐりめぐつた。六十五歳の時夫人が歿せられた。六十八歳魯に反つて、これより専ら力を教育と著述に用ひられた。周の敬王の四十一年四月——懿徳天皇の三十二年皇紀百八十二年——年七十三で魯で歿せられた。城北の泗上に葬るとある。孔子の一生は全く不遇であつた。しかしその教は支那朝鮮日本に流布して、世界の四聖(耶蘇釋迦ソクラテス)の一人として尊敬せられてゐる。

孔子——伯魚——子思……孟子(伯魚は子、子思は孫、孟子は學統をつぐ)

子曰。富與貴。是人之所欲也。不以其道。得之不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道。得之不去也。君子去仁。惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是。顛沛必於是。(里仁五章)

子曰く、富と貧とは、是れ人の欲する所なり。其の道を以てせざれば之を得るも處らざるなり。貧と賤とは、是れ人の惡む所なり。其の道を以てせざれば

之を得るも去らざるなり。君子仁を去らば惡んか名を成さん。君子は食を終ふるの間も仁に違ふことなし。造次にも必ず是れに於てし、顛沛にも必ず是れに於てす。

その道を以てしなければ、富貴にもをらず、貧賤をも去らない。富貴を欲するよりも、道にかなふことが大切である。貧賤をいとふよりも、道にかなふことが大切である。それを會得させることが眼目である。

子曰。中庸之爲徳也。其至矣乎。民鮮久矣。雍也第二十七章)

子曰く、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民久しきことすくなし

好めば耽り嫌へばうつちやつてしまふ。耽るのもうつちやるのも、道を得たものではない。花ならば咲きもそろはず、散りもはじめぬ所に、花としての至美があるといふ類。さらに次の例を見れば、中庸の意義は明かになると思ふ。

子貢問。師與商也孰賢。子曰。師也過。商也不及。曰。然則師愈與。子曰。過猶不及。(先進第十五章)

子貢問ふ。師と商といづれか賢れるか。子曰く、師や過ぎたり。商や及ばず。

曰く、然らば則ち師まされるか。子曰く、過ぎたるは猶及ばざるがごとし。

孔子を七十歳としたら、子貢は思案ざかりの三十九歳、師字は子張は二十二歳の血氣ざかり、商字は子夏は二十六歳。ともに弟子の中の若者である。ある時孔子の前に子貢がゐて、参考のために、先生の御意見をうかゞつておきたいのですが、この頃の若い弟子のうち、師と商はどちらがまさつてゐるといふお見込ですか。」と問うた。すると孔子は、師は出過ぎものだし、商は引込み思案のものだ。」とおつしやつた。そこで子貢は、では師がまさつてゐると申しませうか。」と反問すると、過ぎたるは及ばざるが如し。」とおつしやつた。進む時計はよくれる時計と同じく正確でないやうなものだ。中庸とは進みもせず、おくれもせず、正確な時計のやうなものだ。

子曰。朝聞道。夕死可矣。(里仁第十八章)

子曰く、あしたに道を聞けば、ゆふべに死すとも可なり。

命よりも道をきくことが大切だ。道を聞かなくては人と生れたかひがないといふのである。

子路問君子。子曰。修己以敬。曰。如斯而已乎。曰。修己以安人。曰。如斯而已乎。曰。修己以安百姓。修己以安百姓。堯舜其猶病諸。(憲問第四十五章)

子路、君子を問ふ。子曰く、己を修めて敬す。曰く、斯の如きのみか。曰く、己を修めて、人を安んず。曰く、斯の如きのみか。曰く、己を修めて、百姓を安んず。己を修めて、百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶これを病めり。

子路は孔子より若きこと九歳、年齢に於て最も孔子に接近した弟子である。子路は他の弟子とはちがつて、よく孔子に口ごたへをする。その性質にもよることだらうが、一つには年齢が接近して、経験が相似てをるからでもあらう。子路が「君子はいかなるものですか。」と問うた。孔子のおつしやるのに、「己の身を修めて、他人を尊敬するものだ。」と。すると子路は、それくらゐなことですか。」といつた。孔子はさらに「己の身を修めて、己に接近する人を安んじさせる。即ち共に道を行ずることを楽しませる。」と。一段高いところを説かれた。すると子路はまた「それ位なことですか。」といつた。孔子はさらに一段高い所を語られた。「己の身を修めて、天下萬民を安んずる。それが君子といふものだ。」とか

う仰せられて、なほ獨語のやうな形で、己を修めて百姓を安んずることは、古の聖人堯や舜でも、これに苦しまれた。お前は言葉の上に君子を求めてゐる。君子はその行の上にあるものだ。」と戒しめられた。孔子の主義は己を修めてといふにあるのだ。

葉公問孔子於子路。子路不對。子曰。女愛不曰。其爲人也。發憤忘食。樂以忘憂。不知老之將至云爾。(述而第十八章)

せつ公、孔子を子路に問ふ。子路こたへず。子曰く、なんぢなんぞ曰はざる。其の人となりや、憤を發して食を忘れ、樂みて憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らずと。しかいふと。

葉公は楚の葉縣の長官。身分をかへりみず、自ら葉公といつてゐる程の不屈者。その葉公が子路に孔子はどんな人かと問うた。ところが、子路は、お前等がきいたとて、わかる人ではない。」といつたやうな心持で、返事をしないで歸つた。歸つて後孔子にその事を話すと、それはをしい事をした。お前は何故答へなかつたか。「やらうと考へては、向上的精神つよく、食事の味不味などいふことをか

へりみない。道を楽しんでは、いかなる憂もこれをみだすことが出來ず。老の到來も少しも念頭におかないで、自彊やまざる人である。」と、まあさうでも答ふべきであつたのに。残念なことをした。

以上あげた六つの言葉で、孔子の面目はほゞうかゞはれる。その孔子が四十五六の年から、しばらく魯に用ひられ、治績大いに擧つたが、それもたゞ東の間、奸臣のために魯を去らねばならないことになつた。それから用ひらるゝ君を求めて、天下を流浪周遊して、つひにその意を得ず、七十になん／＼として、魯に歸り、専ら教育と著述に力を用ひられた。弟子三千人、身六藝に通ずる者七十二人。そのうち顔淵、曾參、有若等が最もすぐれてゐた。顔淵は三十二歳で歿した。弟子第一の顔淵の夭折は、孔子にどれほどの痛手であつたか知れない。その死を吊して、噫、天われをほろぼせり。天われを喪せり。」といはれたのもうかゞはれる。曾參、有若のことは、論語の中に曾子有子——勿論その弟子が集録したものとはいへ——といつてあるのを見ても、他の弟子より一頭地をぬいてゐたことが知られる。それらも附説したいと思ふ。

教材

支那幾千年の人物中大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尙今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし(孔子の歎美)孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯魯即ち今の山東省山東省の地に生れたり。少時より學問に勵み(朝に道を聞く)長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げし(己を修)かども、奸臣の爲にさまたげられ(富貴は人所な)久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて(齊衛陳)用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり(發憤し)門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵(孔子より若きこと)曾參(同じく)有若(同じく)等七十二人なりき。

論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。

孔子は正義の念強き人なりき。其の言にいはく、富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らずと。(五里仁第)

孔子常に中正不偏を貴び、中庸は徳の至れるものなり。(雍也第二)といひ、過ぎたるは及ばざるが如し。(先進第)ともいへり。又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり(里仁第)といふに至れり。

孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。「おのれを修めて人を安んず。」(憲問第四)とは彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

かつて自らいはく、發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず(述而第)と其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目よく此の語にあらはれたりといふべし。

第三課 上海 (二時間)

今は早五年のむかしになつた、私が上海を兵庫縣武庫郡住吉村甲南小學校の教壇に取扱はうとして、立往生をとげたのは。これらが文部省でいふ地理的教材だらうが、何處に焦點を置いたらよいか、皆目見當がつかぬ。大阪の豪商伊藤忠兵衛氏に相談すると、「大阪商船の専務村田省三氏にはかれ。」といふことだつた。そこで私は頗る突飛だつたが、村田さんに御教授が願はれないでせうか。」と話をすゝめて、うまく承諾を得た。村田氏は九年間かの地の大阪商船の支店長をしていられたので、上海通である。

いよ／＼その日が來た。勿論教授の様式は獨演で、全く坐談のやうだが常識の豊かな人の話には、誰でも知らず／＼流される。丁度一時間に全内容をほどよく教授せられたが、私の求むる焦點はつひに出て來ない。こゝが地理教授と讀方教授の異なるところか。私としてはよくわかつたけれども、魂は依然として淋しい。何故に特に上海を學ばなければならぬかといふ感激が湧いて來ない。私は面

白かつたが、やゝ失望した。すると村田氏は、村田のをぢさんがいつたと、今日歸つたらお父さんお母さんに話して下さい。上海に於ける貿易で、重要な關係を持つてゐるのは、日英米の三國で、中でも日は近距離にあるといふ有利な條件を持つてゐる。長崎から二十五六時間で到達が出来るのだ。もしこの有利な上海市場に於て、英米の下風に立つやうなことがあるとしたら、いかなる天地に於ても、日本は頭が上らないのだ。上海は日本最後の競争場だといつてもよい。」と結ばれた。私はこの時目のさめた感がしてうれしかつた。この一焦點を得たがために、本課各段の智識が動くのを感じ、重要語句なども自ら浮んで來るのを覺えた。なほ尋四の揚子江と相まつて、我が國民の知らなければならぬ一地點であることを知つた。同時に編者の意のある所が讀めたやうな氣がした。私が着眼點を持たないで壇に立つことをその職務に對する冒瀆のやうに感じだしたのも、實はこの時からだ。

第一時には全文通讀次に一段二段三段の傍線を施した部分を書かせ、第一段では近距離による我が國の有利な位置、第二段では租界には日英米三國の共同租界

と佛の獨立租界とあつて、ともに支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐるが、有力なのは共同租界である。共同租界の代議員は、英六人、米三人、日一人とのことである。第三段では何故世界人種の展覽會のやうになるかといふに、こゝに足をいれた外國人は、容易にこゝを去らないといふ。それは第一物價がやすく、心地がよいからだ。趣味からいつても、西洋人がこゝまで來るとはじめて東洋に來た感じがするといふし、東洋人はこゝまで行くと、西洋に行つた感がするといふ。それらも有力なる一理由だ。

第二時には全文通讀後第一時の復習、次に四段五段六段に傍線を施した部分を書かせ、四段では、租界の外の商業の取引の盛な部分は、支那風の町と趣のやゝ異なつてゐること、五段では大規模の波止場は、交通上重要な位置なるが故に、支那の各地との取引も便利、それがやがて日英米三國の激烈なる競争場となつてゐること、六段では外國の投資によつて、工業都市とかはりつゝあることを補説したい。支那が我が國貿易上の一大得意であり、同文同趣の國であるが故に、日支融合上に便利なことが多い。何といつても、支那と相提携して、共進共榮の道を講じなければ

ならないことを、常に念頭において説かねばならぬ。

教材

長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。それから五十海里ばかりさかのぼつて黄浦江といふ支流に入り更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。(二十五六時)

上海は支那第一の貿易場で、百萬以上の人口を有する大都會である。こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域に住んでゐる。租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。(代議員英は六人、米は三人、日は一人)

租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。市街の様子も支那風ではない。アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、河岸には領事館・税關を始め、銀行・會社等のりつばな建物がそびえてゐる。其の外各種の學校や、博物館・圖書

館等の修養機關、公園、競馬場、劇場等の娛樂機關が到る處に散在してゐる。(東西趣味を併せた)

租界の外に出ると大ていは支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。(純支那町にあらず)

上海が黄浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。(大規模)此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。(長江の門戸)貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、(競争場裡)我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。(數多けれど優勢にあらず)

上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、近時工業も次第に盛になつて、紡績造船製粉製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。(外國の投資によるもの多し)

第四課 遠足 (二時間)

「今日はうれしき遠足の日よ。」といひ、今日はたのしき遠足の日よ。」といふ遠足の一日を歌としたのが、この課である。一番は遠足日和に遊心物々たる出發の際である。二番は平野の中を進み行く三人、右のお寺、左の古城、もえ出づる木の芽、草の芽、咲き出づる花様々、それらが遠足の三人をめぐつて、こゝに繪畫をさながらの春の展開。酔つた氣分で進み行く楽しさである。三番は展望自在な峠の上にとどりついて、輕き疲勞を感じ、腰を下して、里見下して、菜の花は黄、蓮華は紅の花ざかり、綠一色の平野に毛氈をしいたがやう。こゝに母の情のこもる辨當を開いて、心の友と語りつゝ、食ふ。辨當はたしかに遠足の一つのうれしさである。四番は峠を下りて、川舟やとひ、大川を下る。岸の柳は風になびき、舟は次第に桃さく村に近づく。こゝに心ゆくばかり遊んで、歸りは徒歩か、再び舟か。これが今日の遠足最終のたのしさである。新字も多からず、自分の生活に通ふ詩であるから、三人のうれしと感じ、たのしと思つたことを尋ねさせるのが眼目である。

まづ全文通讀、次に各番の三句を書かせ、三番目の句「いざや、我が友うち連れ行かん。」春は繪のごと我等をめぐる。「笑ひさゞめくひるげのむしろ。」行くは何處ぞ桃さく村へ。」に各番の大意のこもつてゐることから、讀解をすゝめて、遠足のうれしく樂しきを歎美することにまとめるがよい。歸途を想像させる事も忘れてはならぬ。

教材

一

鳴くやひばりの聲うらゝかに、(がさそふが如し)
かげろふもえて野は晴れわたる。(遊々心)
いざや、我が友うち連れ行かん。(發出)
今日は、うれしき遠足の日よ。(要は)

二

右に見ゆるは名高き御寺、(寺をめぐる話)

左に遠くかすむは古城、(城をめぐらす話)

春は繪のごと我等をめぐる。(一切繪中にとける)

今日はたのしき遠足の日よ。(要は)

三

たどりつきたる峠の上に、(疲勞)

菜の花にほふ里見下して、(のけさ)

笑ひさゞめくひるげのむしろ。(母情に)

今日はうれしき遠足の日よ。(要は)

四

風は音なくやなぎをわたり、(ものうきが如し)

船は静かに我等をのせて、(すべるがやうに)

行くは何處ぞ、桃さく村へ。(めざすところ)

今日はたのしき遠足の日よ。(要は)

第五課 のぶ子さんの家 (二時間)

漸くのぶ子さんに親しくなつた少女がはじめてのぶ子さんの家を訪うた文章である。のぶ子さんは行持のたしかな少女で、尊い方だが、そのたしかな行持に接して、悉く反省の資とした少女も、その求むる心の強さに、尊さを認めなければならぬ。要するに修養するといふことは、他人の美事善行の前に立つては、自の及ばざることをおそれ、他人の醜事悪行を目にし耳にしては、その暗い影のおのが心にさすことはないかを顧みて、自らいましめる事である。この課には人間の一生を通じて、服膺すべき二つの教訓がある。その一つは成績物の意義で、一つは整頓の意義である。その意義に立たないで、その結果をのみ責めたら、却つて似て非なる結果を來すかと思ふ。この二つの教訓に着眼して取扱ひ、のぶ子さんの家をおとづれた少女の心に、深く刻みこんだ教訓を求めさせる事が肝要である。

第一時には全文通讀、各段の概要を考へさせたい。次に第一段第二段第三段第四段に傍線を施した部分を書かせ、第一段の「始めて」にのぶ子さんと少女の關係を

考へさせ、第二段に居所は即ち人格及び趣味の反映であること、成績物は育つて來たあとの思ひ出の種であり、同時に自己を見つける唯一のたよりとなるものである。のぶ子さんが一枚の成績物をもなくなさないその事よりも、自己の足跡に不斷の注意を拂つてゐる事が尊いことを知らせたい。成績物を縁にして、日々の活動がたとひ消失してしまつたやうには見えても、それが尊い成績物であることを知らせたい。成績物をあつめることが、單に蒐集本能の活動に終つてしまつては、わるいことではないが、意義が軽くなる。

第二時には全文通讀、第一時の復習次に第四段第五段に傍線を施した部分を書かせ、學校で習ふ本を見失つた時は、多く自己を逸した放心——道を放れた心の状態——の場合で、一家に流れてゐる精神が、知らず／＼の中にかうした事に至らしむること。整頓の眞精神は、一切萬物を尊重する感謝の精神から出てをるものであることを知らせたい。之を功利の問題、見えの問題として取扱つたら、結果はいかによくてもあさましい事になる。それをよく考へさせたい。

教材

今日は、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。(やうやく親し
通された部屋には、古いたんすや戸棚などが並べてありましたが、さうぢもよく
行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。(部屋はその主
のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしや
る所でした。三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで
延びてゐたのださうです。私が来たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止
めてお手傳をしましたが、成績物を一枚も無くなさずにそろへていらつしやる
のに驚きました。(物よりも不
断の注意) のぶ子さんは成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れて
置いて、學年の終におまとめになるのださうです。(夫はな
い工夫)
一年生の時からの成績物も見せていたといひ、其の始末のよいのに感心してし
まひました。「成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念にな
るのだ。」(働く一日一日)と思ふと、私も急に一年からのをまとめたくなりましたが
私のは置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。

「本や帳面はどうしていらつしやいますか。」

と尋ねてみると、のぶ子さんは上の棚を指さして、

「あすこに全部學年別にしてのせてあります。」

とおつしやいました。(整頓)「成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取
出すのにも便利だ。」と思ひました。私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて大
さわぎをすることがあります。(自己を逸した)「こんなによく整頓してゐる中で勉
強したら、どんなに氣持がよいだらう。」と思ひつゞけてゐると、そこへ弟さんが
雑誌を二三さつ持つて来て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれへお入れにな
りました。(習慣)聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出したら後できつ
ともとの場所へお入れになるのださうです。弟さんまでがあんなに氣をつけ
ていらつしやるのは實に感心なことです。(一家一貫)
しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から「モスリンのふろしきを持つておい
で。」とおつしやいました。のぶ子さんはすぐたんすの小引出から取出して、持

つていらつしやいました。見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチなどと一々書いてあります。此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。(萬事が)

お暇してから、私はひとり歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、つくづく恥づかしくなりました。(聲)「これまで自分の不整頓のために、むだに費した時間と労力は大きなものであつた。整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすことだ。」と思ひました。(功利的のみに考へてはならぬ)

第六課 裁判 (三時間)

裁判所で行はるゝ裁判は、児童にはきはめて縁遠いものである。國家が民事裁判といひ、刑事裁判といひ、區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院といひ、判事、檢事、陪審員、辯護士といふやうなものは、児童生活の上にはないが、これに通ふ事實は児童生

活にもないではない。私はこの課を所々で取扱つてみたが、國家の組織を知らせようとして成功した事はいまだかつてなく、おのが生活中にこの事實を發見させて、刑事、民事の意義等を知らせようとした時に、失敗したことがない。要するにこの課の眼目は、裁判は秩序の正しい世の中にするのが其の目的である。「といふのであるが、秩序を亂す行爲といふものについて、たしかな考を持たない児童には、取扱ひにくい教材である。

第一時には全文通讀、次に第一段民事裁判と第二段刑事裁判が自分等の生活中にあることを考へさせたい。一冊の繪雜誌を、兄弟二人で争ふこともあれば、借りた本を見失つて、返せない場合もある。母の仕舞つてをられる菓子が無斷で食ふやうな場合も、嚴密にいつたら犯罪であるやうな類。さうした自分の生活から大人の事實をながめさせ、存外分り易いやうだ。第一段第二段の傍線を施した部分を書かせ、術語とも見るべき、原告、被告などいふ語をよく會得させたい。

こゝに注意したいのは、「守らない人」「返さない人」といふのがある。「守りたくても、事情があつて、守れない人。」「返さうと思つても、返へせない人。」もある。故意に守

らず返さない者があれば、それは國家の力で返すべき事を命令し、守るべき事を命令するのが當然だ。如何に誠意を以てしても、返すことの出来ない場合もある。ここに同情すべき一點のあることを考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第三段、第四段に傍線を施した部分を書かせ、裁判所に四階級ある所以と二回上訴することの出来る所以、裁判に關係する人の原告、被告に對する關係等を考へさせたい。こゝを取扱ふには、四年の大岡さばきをあはせ考へさせるがよい。その一の子供あらそひは民事、その二の石地藏は刑事であるが、檢擧の工夫ともいふべきもの。辯護士も檢事も無い簡單なものであることを知らせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習、次に第五段に傍線を施した部分を書かせ、裁判からうくる吾人の安心を知らせたい。しかし人は事を行ふ際、いかなる場合にも自ら顧みて、是につき、非を避けるものだから、その是を是とし、非を非とする一點にくるひが無かつたら、裁判を必要としない國民のあることを考へさせたい。國家の機關としていかに完備した裁判所があるとしても、こゝで取扱ふ事件の一

つもないことが、教育としては目ざすところである。一心の正に安んずることが、いづれの世に於ても大切である事を知らせたい。

教材

約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。しかし大勢の中にはそれを守らない人(故意もあり止を得ぬ者もある)もある。例へば、借りた金を返す約束の日が来ていくら催促されても、返さない人(人もある)がある。其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると裁判所は兩者の言分(情事)を聞いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、(裁判力)其の借金を返すやうに借主に命ずる。此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。(裁判に教育の意十分)ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁

としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。此の場合には訴へられた者が被告で、検事といふ國家を代表して犯罪者の處罰を求める役人が原告に當るのである。

裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院の四階級がある。裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尙其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院、大審院にと順次に上訴する。かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念入にするためである。(裁判の適當公平を尊重する義)

裁判を行ふのは判事の職務であるが、刑事裁判では、人民から擧げられた十二人の陪審員が事實の判斷を下す場合がある。又民事裁判では、原告、被告の相談相

手、附添人又は代理人となつて其の主張を助け、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。(不正なきを期する三角關係) 裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰することではない。此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な秩序正しい世の中にするのが其の目的である。(裁判目的) 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわるがしい者が勝つことになるであらう。(道に立たば争ふ要なし) 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、我々は安心して生活することが出来ぬ。(本を忘れたら安心出来ず) 裁判は實に正義保護のための大切な仕事であり、判事、検事、辯護士及び陪審員の任務は極めて重大なものといふべきである。(重大は重大なり、用なきが願はし)

第七課 賤嶽の七本槍 (三時間)

血の香の高い材料であるが、人間が權勢を追ひ、勝敗を前にしての行動は、古今を通じて一貫したもののあるのが面白い。而して勝敗を支配するものは、もとより理にしたがふといふことではあるが、最後の決勝は氣によつて定まるやうだ。氣とは統一したる精神より生ずる靈的の力に名づけたものだ。さてこの課を單に軍物語と興じて終るのならば、問題はないが、いやしくも織田家古參の勇將柴田勝家、當年五十四歳の曲者と、新參ながら英傑秀吉、當年とつて四十八歳の曲者との對陣。しかも織田家の爲にとは表面の名で、その實は王侯將相何ぞ種あらんやとの考、天下の權勢を一手に握らうといふ大野心家の對陣であるから、政友會と民政黨の政權爭奪などよりは、さつぱりしてゐて、わかりが早い。まして双方に花方ともいふべき夜叉玄蕃、佐久間盛政三十歳と、加藤虎之助清正二十三歳とが配してある。さうしてその勝敗が氣一つにあることを實證してゐる。こゝに着眼して取扱ふと、軍物語の面白い中に人間味の深いものが流れてゐることがわかる。

賤嶽の合戦を浮樸様のやうにして出すには、勢織田信長歿後の中央の形勢を明かにしなければならぬ。

天正十年六月二日(紀元二千二百四十二年) 京都本能寺に於て、織田信長明智光秀のために殺さる。

同 六月十三日 山崎に於て秀吉、光秀と戦つてかつ。

同 十八日 清洲に於て織田家の相續について、秀吉勝家等會議し、信

忠の子秀信―信長の孫―を相續人と定め、信雄、信孝を補佐として、一旦落着。

秀信は岐阜に、信雄は尾張、信孝は美濃、秀吉は山城、勝家は近江長濱を得て、各その地に歸つた。

その後、信孝、勝家、伊勢長島の瀧川一益といふ一黨が出来て、信雄、秀吉を除かうといふ運動がはじまつた。

天正十年十一月、秀吉、勝家の養子勝豊が守つてゐる長濱城を攻めて降し、さらに進んで信孝を岐阜に攻めた。信孝は和を請うて事落着。

天正十一年正月、秀吉、信雄と共に瀧川一益を伊勢に攻めた。

同 三月、柴田勝家兵を近江に入れた。そこで信雄をして一益に當らせ、自ら長濱にいつて賤嶽、余呉の湖畔に砦をつくつて、戦備をととのへた。

同

四月信孝兵を岐阜にあげて、勝家に應じた。秀吉これにむかつて、大垣に陣取つた。この虚に乗じて、勝家は盛政に命じて、賤嶽にむかはせた。

理からいへば、勝家にかちみが多い。兵数からいつても、その虚をついた事からいつても。しかし氣の上からいふと、主君の仇を討つた、大徳寺で大法會をいとなんだなどいふことが、どれほど秀吉方の氣を充實させたか知れぬ。勝家の軍は敏捷を缺き、秀吉の軍は電光石火だ。

第一時には全文通讀、次に五段の終までに傍線を施した部分を書かせ、第一段では「春は來りぬ」と待ちまうけたるに兩雄の心事を思はせたい。第二段の思ひもよらぬ敵の一隊では、大岩山にも油斷のあつたことを考へさせたい。第三段の盛政の成功が、第四段の油斷となり、第五段の大敗のもとを作つたことをも考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第六段第七段第八段に傍線を施した部分を書かせ、第六段の秀吉の言に眼中敵なきことを思はせ、第七段で士氣大いに振ひ、第八段では戰機熟して、最後の一蹴に達したことを考へさせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習、第九段第十段第十一段第十二段中に傍線を施したる部分を書かせ、第九段の最後の一蹴が、旗本の若武者に命ぜられたこと、第十段の七本槍中の一本槍を精叙して、他を省いたこと。ことに第十一段の「正國の首は終に清正の手に入りぬ」。十五字の一段をいかに讀むべきか。「終に」といふに、勝敗の容易に決せられなかつた事を讀ませたい。賤嶽の戰は要するに氣の戰である。

この課には、「春は來りぬ。」戰は午前のうちに終りぬ。「二十日の月は上りぬ。」正國の首は終に清正の手に入りぬ。」と、ぬが巧につかつてあつて、やはらかみと、自然の成行のやうな感をつよめさせる。全課復習の際などに通じて考へさせたい。

勝家は敗殘の兵三千をもつて秀吉の軍にあたり、戰死を遂げる覺悟であつたが、面受勝介に諫められて、のがれて北莊―福井市―の本城に歸つたが、秀吉に圍まれて、四月二十二日城に火を放つて自殺した。佐久間盛政は北莊の落城以前に捕へられ、五月京都の六條河原で殺された。これらも補説すべきかと思ふ。

教材

春は来りぬ。(天正十一年四月十一)越路の雪も解初めたれば、柴田勝家(織田家古参の勇將)先づ佐久間盛政(夜叉蕃年三十)をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀬に討つて出でしむ。(兩雄立たず)待ちまうけたる秀吉は、琵琶湖のほとり(余吳湖の南)に十三箇所のとりでを構へ、諸將を配置して防備をささ怠なし。やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。(たしかに優勢)

時は天正十一年四月二十日のあかつき、十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、幾頭かの馬をひきて、余吳湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎに進み來る。(不意の出来事)あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやにはに斬倒されたり。

危く逃延びたる一二の兵卒は、せもどつて急を告ぐれば、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。(鋭鋒あたるべからず)

寄手の大將佐久間盛政は、今日の戦に勝ちほこり、(油斷大敵)明日は進んで賤嶽のとりでをあとし、一舉に敵をみぢんにせん。(敵を動かぬものとして)と、自らは尾野路山に野營し、大岩山、鉢峯などの要所々々にそれ〴〵將卒を配置したり。(勝家しきりに兵を引けと命ず)

夜ふけに及んで、鉢峯を守る兵卒の一人、ふと東南の方を望み見るに、美濃路の方面に當りてたいまつ(大勢)の光おびたくしく、何とも知らぬ物音ざわ〴〵として夜の静けさを破る。(大勢)こはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、こは如何に、降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊に満ち〴〵たりと報じ來る。(既に氣を味方)味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。此のまゝ、新手の兵を迎へては、萬に一つの勝算もなし。(今は何ともせ)盛政は勝つてかぶとのをしめざりし油斷を悔いつゝ、俄にやみの中を退却しはじめたり。(たゞあ)

木之本には秀吉の來れるなり。これより先、秀吉は織田信孝(岐阜)を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀

吉は、持ちたる箸を投捨てて、すは勝つたるぞ。」と手を打つて喜び、(氣敵を)先づ五十人の兵に旨をふくめて先發せしめ、やがて將卒のそろふをも待たず、者どもも續け。」と馬にむちうつて近江に向ふ。(兵は迅速)五十人の兵は行く／＼百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。夜に入れば、見渡す限りのかゞり火晝をあざむく中を、一萬五千の軍勢まつしぐらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。(堂々たる進軍)

二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。(士氣差あり)

明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。今まで賤嶽の山上より、またゝきもせず戦況を見居たりし秀吉、勝政の引足になりたるを見て、(戦機熟す)すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせか

けたれば敵は見る間にばた／＼と倒れて、一軍今や崩れんとす。(武器にも)

秀吉はるかに之を望み、旗本の若武者どもをきつと見て、

「てがらは仕勝ちぞ、(前に)明し、かゝれ／＼。」

と大音聲。

「承る。」

と、福島正則、加藤清正、向嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟屋武則、片桐且元等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。(元氣横溢)

中にも加藤清正是、山際のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。正國も槍を合はせ、しばらく防ぎ戦ひしが、俄に槍を投捨てて、

「組打。」

と叫ぶ。(たゞ者に)直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清正やがて正國をねぢ伏せたり。(力やま)ねぢ伏せられながら正國、清正がよろひのす

そをしつかとつかむ。(敵もさる者) 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝじの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。(機危) 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。(かいつれ) 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝじの枝に残つて、二人はしつかと組みたるまゝ、ころくゝと轉び落つること三十間許。(生死の境) 正國の首は終に清正の手に入りぬ。

福島正則以下の六人、またそれ〴〵に名ある勇士を討取つて、武名を天下にとゞろかせり。武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。(その名美し)

第八課 瀬戸内海 (三時間)

瀬戸内海は到る所に景勝の地が多い。世界海上の一大公園といふも過稱ではない。しかし日本文化がこの海によつて導かれたことも大きく、今後日本國民の

海事實習地としても考へさせたい。さう見る所に瀬戸内海は著しく吾人に親しさをますかと思ふ。着眼をこゝにおいて、風景交通史蹟名勝等を取扱ひながら、折々海事實習地として考へると意義の深いことを附説したい。

第一時には全文通讀、第一段瀬戸内海の位置について、傍線を施したところを書かせ、地圖と照合して語義をさとらせたい。第二段は全文分解的書取をさせて、形の上から味讀する手引を與へたいと思ふ。

瀬戸内海には 到る處に 岬あり、
灣あり
大小無数の島々各所に散在す。

島かと思れば岬なり、
岬かと思れば島なり。

一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、
水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

かくして島轉して、其の盡くる所を知らず。
海廻り

第二時には全文通讀第一時の復習次に

春は島山かすみに包まれて眠るが如く、

夏は山海皆緑にして目覺ひるばかり鮮かなり。

海の静かなることは鏡の如く、

朝日夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影ものどかなり。

月影のさざなみにくだけ、

漁火の波間に出没する 夜景も、亦一段の趣あり。

を書かせて、四季の眺め、日々の景色の美しさを考へさせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習次に地理附圖によつて、本土側の大阪・神戸・尾道・宇品・四國側の高松・多度津・高濱等を知らせて、汽船通航のにぎやかなこと、史蹟名勝を知らせて、西洋人の批評のあたれることを考へさせたい。

〔嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、

〔屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

と書かせるがよい。なほ神武天皇の御東征もこの海によりたまひ遣唐使なども多くこれよりした事と思ふ。ことに海賊の活躍なども、この海に於ける國民の海事實習のやうに考へられるのは、海がやさしく明るい爲であらうか。

教材

本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峽あり。四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊豫海峽をなす。淡路島の東端、本土と相望む處、紀淡海峽となり、四國に近き處、鳴門海峽となる。此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。(瀬戸内海の輪廓)

瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。(作つた庭の池のやう)船の其の間を行く時、島かと思れば岬なり。岬かと思れば島なり。一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。(眺望刻々にかはる)

春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかり鮮かなり。(四季それによし) 兩岸及び島島見渡す限り田園よく開けて、毛氈せだを敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。(悉く風景の中のもの)

海の静かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影ものどかなり。(日々のながめよし) 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。(夜々のながめまたよし)

瀬戸内海の沿岸には大阪神戸尾道宇品高松多度津高濱等良港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。(大切なる交通路。たなびく)

内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、(之に次ぐもの多し) 屋島壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。(その他にも亦あり) 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。(遊ぶによし、修學旅行)

第九課 植林 (二時間)

この課は少年の追憶をまとめたものである。少年の家は造林を家業としてゐるが、かうした家は全國にさう多くはあるまい。造林を副業としてゐる家は割合に多いが、それでも國民全體から見れば少數だらう。私は全國の小學兒童が、少年のこの追憶を自分の生活に落して、親しく讀み得る者が幾人あるかと思ふ時、自然前の様な事が考へられる。ところで之を國語讀本の教材としたといふについては、強い國家的の要求があるのだと思ふ。試みに昭和二年の我が國木材の輸入高を見ると、實に一億三百七十五萬八千圓である。勿論大震災復興の際で、かうした巨額の輸入をしたのだとは思ふが、とにかく植林は國民全體が常に念頭におかねばならない問題だと思ふ。木材の輸入防止にはかにその目的は達せられな

いが、之が解決の手段としては、小學兒童をして植林に興味を持たせることが最捷徑であらう。即ち造林専門の家の少年の追憶に、造林の一端をうかゞはせ、その實習を學校園の苗圃にうつして、松・杉・檜・樺・櫟等の苗を仕立て、それを移植して、成長

する様を見させるがよい。こゝに着眼して取扱つてこそ、兒童に意義ある教材になるかと思ふ。

全文を讀味はつて見ると、雨が降つてゐる。』ので、これでは明日の山廻りはだめだ。』と輕き失望に陥り、うね／＼と續く岡。』が、雨に煙つてぼんやりと遠く見える。』ところから、植林の追憶にはいつてゐる。この追憶は終りの段の「ぼんやりいろいろの事を考へてゐるうちに。」につゞいて、あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。』といふ希望に輝いて終つてゐる。さらに造林の追憶について見ると、あ、その植付をした時はまだ寒かつた。』と思ひ出しながら、覺書を手にして、植付には細材をとる目的のところと、太材を取る目的のところとあること。地藏山も十五年目には間伐をしなければならぬこと。補植、下刈、枝打等、順々に思ひ出して、伐採のことから、植林は貯金のやうなものだ云々。』と父のことばで結んでゐる。取扱ふ上にもこの文の結構を考へなければならぬ。

第一時には全文通讀、次に第一段と第二段と第七段とに傍線を施した部分を書かせ、第一段と第七段との文で追憶のたのしさ。それが自分を育てる大切な糧で

あることを知らせたい。第二段は林業専門家の覺書から、細材太材が必要によつてきまることを考へさせたい。――京都大阪地方のやうに、杉の細材で垣根を作る所では、坪當二三本も植ゑて、早く間伐するが利益の類。

第二時には全文通讀、第三段第四段第五段第六段に傍線を施した部分を書かせ、造林に關する一般の知識を得させたい。なほ造林が國家百年のはかりごとで、剩餘の資力を之に投ずるは、有利な事業であることも知らせたい。

教 材

障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。(おのづから物をおもはせる)「これでは明日の山廻りはだめだ。」と思ひながら、机によりかゝつて向ふの方をながめると、うね／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。(追憶を)「あそこは一昨年植付をした地藏山だ。」と思ふと、山の背を通つてゐる小路の中には、さんで四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。(追憶はた)「あ、その植付をした時はまだ寒かつた。」と思ひ出しながら、さつきあとうさんのいひついで、明日の用意に出してゐいた植林地の書付を開いて見る。地圖の。

中の薄縁に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから次々といろく／＼の印がついてゐる。(林業専門)

「地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。一坪一本の割」とおとうさんの手で記してある。一昨年植付けた時の覺書だ。あの時、「こんなに間を置いてよいのですか。」と僕が聞いたら、おとうさんが

早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間を置いて植ゑるのだ。今に御らん、此のくらの離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなければならぬやうになるから。」

といつて笑つてをられた。

植付けた苗木の枯れた處へ補植をするのは、(秘訣)翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであらう。下刈(下刈)はいつも土用中にするので、ずるぶるん苦しいが、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐる

のを見ると、非常にうれしい。(木に對す)木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。(光を求めて)

毎年春の初か冬の半ばにする枝打は、面白いものだ。なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よささうに見える。(植林に大切な作業)いつかにもいさんが、

「杉の散髪だ。」

といつてみんなを笑はせたことがある。(道徳はう)おとうさんのお話によると、枝を打てば、山火事の危険(利益一)を防ぎ、又空氣の流通(利益二)がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。それから始めて聞いて面白いと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来る(利益三)ことである。生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。おとうさんは、よく植林は貯金のやうなもので植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。(自然の力)とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、(少年時代の特色)いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。(なつかしい)あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。(希望がわく)

第十課 手 紙 (二時間)

この課には二つの着眼點があるやうに思ふ。その一つは春田延太郎氏の病氣について、友人である馬場要助氏が色々心配しての親切と、これをうけた春田延太郎氏の心からなる感謝との美しいつながりを知らせることである。他の一つは現に社會には行はれてゐるが、變體ともいふべき候文の讀解を知らせることである。

友の病をあんじて訪問を怠らないのは、兒童の生活にもあることだ。手紙によつて慰問する事も、決してないことではない。入湯をすゝめ葛粉を贈るのであるから、兒童の生活にはひしと響き難いが、必ずしも想像させるのに困難ではない。變體の候文、もとより特殊の用語があり、送り假名等もちがつてゐるが、既に尋五に於て、口上書類から水兵の母の手紙位までを讀みこなしてゐるのだから、さして困難ではあるまい。こゝでは形の整つた候文として考へさせることも大切なことだ。

拜啓 前文 見舞のことば 心配のあまり 見舞品 結尾 敬具
 拜復 前文 見舞品のお禮 病状のこまゝ 感謝 結尾 拜具

第一時には馬場要助より春田延太郎へ出した手紙をよませ、用件の何であるかを考へさせたい。次に傍線を施した部分を書かせ、その部分の口語譯に特に注意させたい。馬場氏の好意の特にかゝやいてゐる部分を明かに知らせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習次に春田延太郎から馬場要助へ出した手紙の用事が何であるかを考へさせたい。次に傍線を施した部分を書かせ、その口語譯に特に注意させたい。春田氏の特に感謝の意のあらはれてゐる部分を明かに知らせたい。

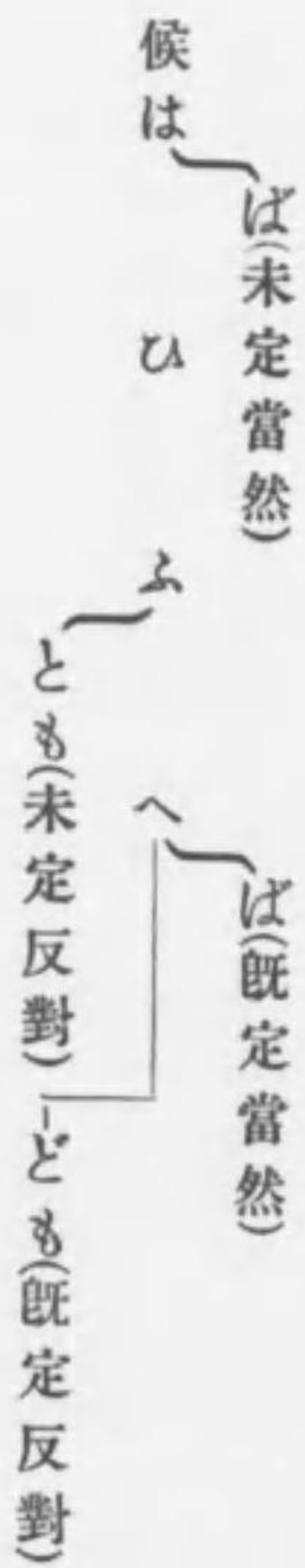
餘暇があつたら、候しらべ、候文の口頭練習等も行はせたい。

御無沙汰致しました。ながらく御無沙汰致しました。御難儀でございました。不都合ですけれども。お出になりますなら。

などを口頭で候文にあらためていはせる類。

なほ適當な機會に、候はば、候へば、候ふとも、候へどもについて考へさせたい。

しかし之をこの時間にわからせることは困難であると思ふ。幾回か復習を重ねて、十分に會得させたい。



教材

拜啓。久しく御無音に打過ぎ、失禮仕候。(文前)さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。(病氣と知る御)しかし此の頃は、餘程御快方に向はれ候とか。何とぞ十分御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様切に祈り申候。(見舞のことば)御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。何分田舎にて萬事不便には候へども、若し御光來相成候はば、

及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。(思ひあ)尙當地産の葛粉少少御見舞の印
までに御送り申上候間、御受納下され度候。(お口にも)先づは御見舞までかくの
如くに御座候。(尾結)敬具。

五月五日

馬場要助

春田延太郎様

拜復。御親切なる御手紙有難く拜見仕候。(文前)尙又結構なる葛粉御送り下さ
れ、御厚情の程深く謝し奉り候。(見舞品)實は去月十日頃より感冒の心地にて引
きこもり居候處、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。(病勢)しか
し幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。(病勢)今少しく
日もたれば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御
地へ参り候やもはかり難く候。其の節は何とぞ宜しく願上候。(謝感)先づは取
りあはず御禮まで。(尾結)拜具。

五月八日

春田延太郎

馬場要助様

第十一課 畫師の苦心 (三時間)

藝術家の心事を取扱ふのがこの課の眼目である。世には藝術家と藝人といふ
ものがある。藝術家は繪畫でも、音楽・彫刻でも、それがすべて生命の問題であり、藝
人はそれが報酬や衣食の問題である。故に藝術家と藝人とは似て非なるもので、
態度の上に相容れない程の差がある。そこを第一に考へておきたい。

この事實は柳澤淇園著雲萍雜誌に出てをる。淇園名は里恭、大和郡山の名門、(家
老職)文武兩道に達し、詩歌・書畫・音楽・篆刻・醫藥等の技に精通す。客を好み、食客常
に門に滿つ。元祿十六年(紀元二千三百六十二年)將軍綱吉の代に生れ、寶曆八年(紀
元二千四百十八年)將軍家重の代に歿す。年五十五。原文には畫師は狩野元信、寺
は泉州堺の一國寺と明記してある。元信は三年一國寺に寄食して、碁をうつては
かりぬたといふ。同志のこの地に旅行した者が、實地を踏査して、一國寺にはそれ

がないといつてゐた。考ふべき事に思ふ。

私はこれを取扱ふ毎に、畫師といふのは元信ではなくて、淇園その人のやうに思はれてならぬ。あたかも親鸞を甲乙丙丁の文士が取扱ふと、一人の親鸞が甲乙丙丁四様にあらはれる。蓋しそれは親鸞の差ではなくて、取扱者の差である。要するに畫師の苦心を歎美する所に、淇園が躍如としてあらはれてゐるやうに思ふ。

畫師が鶴と檜一本を扱ぐについて、苦心した所が二つある。その一つは鶴を描くについてである。これは心なき住持によつて、失敗に終つた。一つは檜に一枝を書き添へるについて、藝術良心の満足を得るまでに成功した。これを靜かに考へあはず時、鶴の一羽でも、檜の一枝でも、畫師にとつては全生命であることがわかる。さらに考へると、鶴を描くについては、くもりなき心に、力ぎりの苦心——藝術良心の満足——をこらしてゐたのを、住持のためにやぶられ、檜については一枝の不満足を常に感じながら、旅をつゞけてゐたが、箱根山中の檜を見て、自得して全く満足の域に達したのである。こゝに着眼して取扱ひたいと思ふ。

第一時には全文通讀、苦心の存する所を考へさせたい。第一段の傍線を施したる部分、及び對話を全部書かせて、それについて住持の言はことばとして寸分のすきもなければ、俗氣紛々。かうした心ではこの畫師の心はよめない。畫師のことばは天真流露、言そのまゝが靈である。住持のことばの中に、「一家を成せる。」といひ、「もとより。」といひ、「かくておはすべしにあらねば。」といふ。畫師に對する心持がわかる。それらを十分に考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第二段第三段に傍線を施した部分を書かせ、三昧境に生き得る人の尊さと、それに接してすら、自己に歸り得ない者の境地のあさましさを考へさせたい。「此の一言を聞くや。」に三昧境のみだれ、——畫師として悲しいこと——を考へさせたい。謝恩のためにとて、強いて、書いた檜一本、満足の作品でないことも考へさせる要がある。

第三時には全文通讀、第二時の復習、次に住持と畫師の對話全部を書かせ、藝に生きる者のうつくしさを知らせたい。人は畫師ならずとも、この日々の生活をみつめて、それを三昧境として生きたいものである。

教材

昔、泉州堺さかいのなにかし寺に、或畫師（狩野元信）久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年（原文に三）を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、

「君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。
（世にも不思議）我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、（誤解す）何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。
（をしき君）愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。
（同時に面倒も）見難し」

といへば、畫師

「そはいと名残をしき事なり。（純眞無垢）さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。
（人情の自然の）

とて、心構せし様なりしが、尙筆も取らで數日を過しぬ。（苦心第一）
或夜小僧住持の居間に來りて、

「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」（小僧は）

とさしやきければ、住持ひそかに行きて見るに、（のぞくと何事）畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寢起する様なり。（苦心第二）「さまたげせんも心なし」と思ひて、住持は其のまゝ寢間に入れり。（上用來）

翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたるなり。（神來の氣）其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡丹青の妙言ふべからず。（名作）かくて次の夜は如何にとうかゞふに、（悪い丁簡）畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、住持は尙知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。（いつまでも知らぬ顔）其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。夜明けて住持、畫師に向ひて、

「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

と、（人は秘密の保）夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、（よせばよいに）畫師驚きて、（道理）

「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」(如何なる
讀心術)
と問ふ。住持

「昨夜のぞき見て知りたり。」(あまりと
しても)

此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、(氣去
る)唯杉戸に檜ひのき一本を

畫がきて東國へ出立しぬ。(鶴も未成品
檜も未成品)

未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。(藝術良心の満
足をいだいて)住持驚きて、(そ
の)

意はか
り難し

「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」(詰る意
もあり)

と問へば、畫師

「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路
すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんた
めに歸りしなり。」(うつくしき心
唯道あるのみ)

とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。(餘韻
長し)

第十二課 ゴム (二時間)

ゴムは奇態なものだ。その弾力のある所が色々なものに利用せられ、児童にも喜ばれるものである。この課はゴムに關する一般的知識を與へるのが眼目で、必ず児童の趣味に投ずることと思ふ。しかしこの課は、そこをばかりねらつてゐるのではない。近年ゴムの需要が激増した事。その産地が我が國に近い南洋にあること。しかも日本人經營のゴム園の多いこと等は、児童の將來行くべき道に一つの暗示を與へたものかと思ふ。こゝに着眼することは、國民をして海外に進展せしむるに極めて大切なことと思ふ。

ゴムの木からゴムをとることは、既に人間の一工夫である。需要の激増によつてその栽培に適する地を南洋に求めたことも、人間の工夫である。さらに之を加工して種々なる物に用ひることも、亦人間の工夫である。同時にその栽培法、管理法、液の取方等に關して、種々研究熟練を積んだことだらう。それらを靜かに考へさせたい。一切萬物は人の努力をまつて、その使命を全うするものかと思はれる。

その邊に腹を据ゑて取扱ふと、おのづからゴムの知識に國民的の光がそつて来る。第一時には全文通讀次に第一段第二段第三段に傍線を施した部分を書かせ、ゴム栽培の今日に至つた次第を考へさせたい。日本人の海外に於ける有望なる一事業であることをつよく説きたい。

第二時には全文通讀次に第四段以下最終までに傍線を施した部分を書かせ、ゴムの造林管理切付採液加工用途有望な事業であることを考へさせたい。なほ人の工夫研究によつて、ゴムのこゝに至つたことを十分に考へせたい。

漆の木のある地方ならば、栽培とあはせて考へさせることが大切である。なほ植林の課とも豊かに縁をひいてゐる課である。

教材

自動車自轉車のタイヤ、ゴムまり、ゴム人形、消しゴム、靴、ゴム管、ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。(兒童の注意を)一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。(注意から疑問へ)
(太陽の課に等しい)

ゴムは、熱帯地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したもの

である。(説明この一)此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。(以下)これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、(野生の)近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。(栽培の)他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。(南洋の)南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。マレイ半島、蘭領東印度等には日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。(日本人の海外に)

此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかかる。(造林)其の間草をとつたり、虎や象の荒しに来るのを防いだり、苦心はなかく

一通りでない。(理管)切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。切付には餘程熟練を要する。元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで、小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。(付切)此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。(ゴ園に働)集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くのして乾かすのである。(原産地)

こゝまでが原産地における仕事である。かうして出来たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。加硫法とは、ゴムに硫黄(ゆわう)をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

(各國の工場に於ける仕事に)

電氣の機械や、萬年筆の軸(ね)などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。(用途)ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。(有望の事業)

第十三課 ふか (二時間)

ふかの襲來は南洋のスコールに似て、静かな海面に激浪をおこした。船長のふかを發見した叫に、今まで樂園の様であつた海面が、忽ちあらしとかはつた。老砲手が我が子を思ふ一心に、ふかを大砲でうちとめた。それがために危険が全く除かれた。あとには救はれた子、救つた親。その外には奇蹟のやうな出來事を讚歎してゐる船員がゐて、船はもとの平靜にかへつた。題して「ふか」といふのも面白い。之を取扱ふには、まづふか襲來以前の樂しげな様に着眼しなければならぬ。若しふかが來なかつたとしたら、船員一同樂しく泳いで、船に歸るまでだ。したがつ

て助けた老砲手も、助けられた子もない譯だ。さうした場合は、人間としては幸福な一時であるけれども、親が子を思ふまごゝろの閃は、つひに見ることは出来ない。これを心の底に認めてゐる者は、平靜な楽しさの上に、不意の出来事を見るから、兩々相まつて、その場面を鮮明に看取させることが出来る。

この文に特に巧妙をきはめた所がある。知らぬが佛で、既に危難の身に迫りつつある二少年が、嬉々として楽しさに浸つてゐるのを、親は既にその危難を見つけて、立つてもゐてもゐられない場合、讀者も共に苦しむことになる。救ひの方法は絶えた。二少年もはじめてふかの襲來を知つて悶えてゐる。けれども策の施しやうがない。こゝに唯一つの救の道がある。而してその鍵は老砲手の手にのみ握られてゐるのだ。それに氣がついたのが、親のまことといふものである。それから急轉直下、事は思のまゝに運んだ。老砲手はその結果を見るのをおそれ、大砲の上につつぶした。救はれて歸つて来る子を、無言のままで見つめてゐた。すべてが親のまことである。無言の中の餘情にふれさせることによつて、この課には無限の進展を見るかと思ふ。之を學ぶ兒童も、親のかうしたまごゝろに見守

られて、日々に育つてゐることを考へさせたい。

第一時には全文通讀、次に事件の三つにわかれることを考へさせたい。即ち平靜な楽しい海面。次にはふかの襲來で、二少年の生命絶望。次には救への展開である。次に始から五段までに傍線を施した部分を書かせ、老砲手の心事を中心として、その場面を想像させたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第六段第九段第十二段の全文を書かせて、老砲手の心事を考へさせたい。全文の中心をなすものは親心である。子を思ふまことである。題して、ふかといふのは、そのまことをあらはす機縁となつたからである。

教材

昔、アフリカの或港に一そらの船がとまつてゐた時の話である。(話は時から)

熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、(かまはたまつてゐる船)船長から泳を許されたの

で、(泳がれなくて)我先にと海に飛込んだ。(快しかり海)船には船長と老砲手だけ

が残つてゐた。

船員等は如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、中にもうれしさうに見えるのは、十三四になる二人の少年であつた。二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらをしてゐた。(うれしい)一人は老砲手の子である。初は二十メートル以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、三四メートルも後れてしまつた。(がふち)これまでにこゝしてながめてゐた老砲手は、急に氣をもんで、しつかりしろ。負けるな。と、甲板からしきりに勵ました。(心親)

ちやうど其の時、ふかだ(こりお)といふ船長のけたまはしい叫び聲が聞えた。(船長は全責任者)老砲手が驚いて向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。(事大)人人は叫び聲に驚きあわてて、我先にと船へもどつて来る。(生境死)しかし二人の少年はまだ知らないらしい。(が知らぬ)老砲手は氣ちがひのやうになつて、逃げる。と聲を限りに叫んでゐるが、(死より苦し)二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。(安)

救ひのボートは下された。(手配を)しかしとても間に合ひさうもない。(難)其のうち二人はふかの來るのに氣がついた。(既に)驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。ふかははや十數メートルの近くにせまつてゐる。(生時は)

ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。(氣がつ)つと大砲のそばへ寄つて、急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。(とるべき)

ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。(疑問)

「あつ。(ふかの口が少)」と思はず人々が叫んだ。とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとどろき渡つた。(結果)

砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。(見るに)

立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、(少年の)先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。(残つたもの)

喜の聲はどつと起つた。(砲手の喜)

二人の少年はボートに乗せられて歸つて来る。(なせば) 老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。(は出ぬば)

第十四課 北海道 (三時間)

地理科に於てもし札幌・狩勝の展覧・十勝平野の三つをとつて北海道といつたら、果して承認が出来るだらうか。讀方ではその三つに北海道といふ名を冠らせても、甚だしく不都合ではない。ともに代表物で、しかも心持に於て、三者が北海道全體の氣持にびつたりとあつてゐる。そこに地理科と國語科との差があるやうに思ふ。即ち地理科の主とするものは知識で、國語科の主とするものは心のひびきである。たとへば北海道の自然は大體に大規模であるがために、そこに興つた農事も、都市も、展望も、亦大規模でなければならぬ。そこをねらつて取扱ふと、北海道全道の氣分もあのづから文の上に浮んで来る。北海道は自然人事共に行詰つた

所がない。十勝平野でなくても、心ゆくばかり晴々しい所は澤山にある。札幌には、總べてが大規模でのび／＼してゐる。とあり、狩勝の展望には、雄大といはうか、豪壯といはうか。とあり、十勝の平原には、總べて規模が大きい。とあり、十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處である。とある。都市にしても、展望にしても、平原にしても、規模が大きいといふのが共通なやうである。

第一時には全文通讀、市街の代表として札幌がとつてあること、展望の代表として狩勝がとつてあること、平原の代表として十勝の平原がとつてあることを知らせ、三代表の共通點、規模が大きい。といふことを考へさせたい。地理で學んだ都市平原など、思ひおこさせることを怠つてはならぬ。この時間には特に札幌についてくはしくしらすさせたい。札幌については、街路と市街と並木と大通が書いてあるだけだ。商況も書いてなければ、官術學校等も書いてない。せめて札幌文化に深い關係のある時計屋の鐘は、一言でもよいからとつてほしいやうだ。「未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。」は、札幌の氣分を遺憾なく言ひあらはしてゐる。傍線を施し

た語句を書かせ、それをたどつて、札幌氣分を知らせたいと思ふ。真駒内月寒の牧場を札幌に附説したのは、札幌の氣分を鮮明にするためかと思ふ。

第二時には全文通讀、札幌の復習次に狩勝の展望について次のやうな事を考へさせたい。「雄大豪壯な展望は何が之を作つてゐるか。即ち一は日高境の山々である。十勝の大平原である。サポロ嶽の連峯の一つをも忘れてはならぬ。それを千八百尺の高所から眺め下すのであるから、展望はすぐれてよい譯である。それに狩勝の峠の石狩側の密林——今は殆どなし——とトンネルを配し、また十勝側からは曲折してゐる鐵道と、上り列車の一條の白煙を配して、いよ／＼その展望を美しくしてゐる。傍線を施した語句を書かせ、それによつて、雄大豪壯な展望を知らせたい。狩勝の展望は、雄大といはうか、豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。」といふ一文につきてゐる。「雄大」とはすぐれて大きい意。「豪壯」とは勢のえらくさかんな意である。

第三時には全文通讀、第二時の復習次に十勝平原の開けた歴史、そこに興つた農業と、之に従事する農業者の心持を知らせたい。傍線を施した所を書かせて、人と

土地、大平原と機械力、農業と知識等について考へさせたい。自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで働いてゐる十勝平野の農業者は、蓋し農業者の理想とするところであらう。「十勝平野は心ゆくばかり晴々しい處である。」との作者の感想もよく利いてゐる。それらも考へさせたい。

教材

札幌

札幌に來て先づ感ずることは、街路が真直で幅の非常に廣いことである。(特徴その一)市街は此の真直な路によつて碁盤の目のやうに正しく割られてゐる。(名詞的な)主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、(五月、花に全)市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設けてあり、銅像なども立つてゐる。(特徴その二)未開の土地を切開いて思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。(一言にし)市外の真駒内(市についで)及び月寒(自動車時間程)には、大きな牧場がある。見渡す限り

果もない原野に、放牧の馬や牛がいう／＼と草をはむ様や(内)緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、(寒)實にのどかである。(つて大外相ま)

狩勝の展望

瀧川から服室(ひらむろ)行の汽車に乗ると、約五時間後に(こゝまでは凡め)石狩と十勝(としかつ)の境にある狩勝の峠にかゝる。此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線中の最高所である。汽車は密林の間をあへぎ／＼通り抜けて(山火事のために今は密林を避けて)やがてトンネルにはいる。しばらく暗黒の中を通過して再び光明の世界に出た時、突如として眼前に展開せられた風景は(意外)雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。汽車は無人の境を曲折して下る。晝がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サポロ嶽(さぽろがき)の連峯の一つであらう。(汽車は動かざり)はるかの下に一條の白煙をたなびかせて見えがくれする上り列車は、ちやうどおもちやのやうに見える。

十勝の平原

十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは、帯廣の町である。明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始りであつた。當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

此の邊の農業は總べて規模が大きい。畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少なくない。こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大い機械と馬の力による。中にはトラクターを用ひて全く大農式にやつてゐる處もある。(砂糖大根の栽培)トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、ガソリンの發動機が取付けてある。これが大きな鋤(すき)を何本も引いて、ものすごいやうなり

聲を立てながらのそり／＼と歩き廻ると、二間幅ぐらゐに耕されて行く。(機械の力)又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めり／＼と音を立てて根こぎにされてしまふ。農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。(進んだ農業)はてしなく續く廣野の中で、人々は自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處である。

第十五課 人と火 (二時間)

「人と火」と題するその、と文字が面白い。」と文字にこもる意義といつたら、關係といふやうなひびきがある。即ち、火の發見、發火法の工夫、光と熱の利用のこの三つである。

火の發見から温度の快感をさとり、之を食物の調理に應用してから、食物の美味をさとり、強烈な必要を感じては、發火法の工夫となり、燃料の研究となり、熱と光の利用法を研究することとなつた。

人間が最初どうして火を得ただらうかといふ問題に對して、別に記録したものは無いが、思ふにそれは落雷による發火、木の枝と枝との摩擦による發火、即ち自然の火から得たといふことになつてゐる。我が國のやうな火山國では、熔岩のわれ目に木や竹をさしこんで、火を得たこともあらうと考へられる。落雷や溶岩は發火法の研究としては、容易に得られないが、摩擦は最も卑近で工夫し易い。我等の祖先はまづ自然をそのままに師として、木片と木片をこすりあはせることから出發した。出雲大社では現に火切ぎね火切うすを使用してゐる。南洋の土人中にも、この摩擦によつて火をとつてゐる者がある。石と金と打合せて火を取る法も、原理は摩擦と同じである。あの火花をうけとめて、その火を所要のものに移す工夫は、多年の工夫研究によつたものと思はれる。マッチとても摩擦から生ずる熱

を發火に導くところに工夫が存するので、結局同一系統のものである。

火の熱の利用は、食物の調理、煖房動力等であり、光の利用は松の木、魚獸の油、らふそく、種油、石油、ガス、電氣とすゝんで來て、現今は殆ど電氣の世の中だ。この中でらふそくの發明は、燈火の移動を必要とする事から來てをるもので、提灯とあはせて考へると頗る面白い。らふそくの心に蠟をなすりつけてとぼすまでには、長い間の經驗工夫を重ねたことだらう。最初は木や竹に蠟をぬつて、それに火をとぼして持歩いたのだらう。消え易いので、草の纖維をたばねて、それに蠟をぬつて用ひたこともあらう。さらに心を工夫して、蠟をぬるやうになつたのであらう。

要するにこの課の着眼點は、自然の火からその火の發することに思ひ及んで、發火の法を工夫し、熱の利用、光の利用を工夫して來た、研究心の動きに觸れさせることが眼目である。而もその研究は今なほ途中にあつて、之を大成することは、兒童の任務であることを知らしめなければならぬ。なほこの課の發展としては、人と水、人と家、人と食物、人と衣服など考へあはすべきことがきはめて多い。

第一時には全文通讀、次に人と火の關係を考へさせ、この時間には主として火の

發見と發火法の工夫とを取扱ふ。第一段第二段第三段に傍線を施した部分を書かせ、之によつてよく考へさせたい。

「人は火を用ひる動物。」といふけれども、もとは火を用ひざる動物。であつたのだ。それがどうして火を得、火を求むるに至つたかについて考へさせたい。即ち自然の火から、木片と木片、石と金、マッチ、すべてが摩擦の系統である發火法たることも考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、第四段第五段第六段に傍線を施した部分を書かせ、之によつて熱の利用として食物の調理、煖房動力等に用ひらるゝこと、燃料として薪、木炭、石炭、ガス、重油等の用ひらるること、光の利用として燃料からの變遷を考へさせ、燈火移動の必要から、らふそく、提灯等を工夫したことを考へさせたい。なほ文明は明るい世界に住むことだといはれてゐるが、世の中が明るくなるほど、人の心も明るくならなければならないとは、自警の大切なことだ。

發明家によつて生活が便利になる事は、實に文明のたまものといはねばならぬ。しかし便利なるがために、人心が弛緩したら、その便利は或は人間を墮落せしめる

ものかも知れぬ。物質文明に引きづられて生きてゐる者は、可なりによりやうにも見える。文明の世に處する者は、常に能率の向上について注意し、文化人としてはづることなきやうにとめなければならぬ。

教材

「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。(表裏から説く)

一體人は最初どうして火を得たであらうか。(題問) 思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。(温き快感を求めて) 其のうちだん／＼人智が発達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。(自然に學ぶ) それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

(摩擦の變形) 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、マッチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。マッチは今から約百年前に

發明されたものである。(これ形も)

火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、(一) 時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。木炭や石炭や石炭ガスの火は部屋を暖めたり、(二) 物を煮たりするに用ひられ、石炭の火は木炭の火よりずっと熱度が高いので、汽車や汽船や工場の重い機械を動かす、(三) のに大切なものとなつてゐる。

燈火としては、初め松の木や魚獸の油などをたいたのであつたが、其の後らふそくや種油がともされ、石油ランプやガス燈が之に代り、今は電氣を利用した電燈が使はれるやうになつた。(燈火の變遷) かくして人は、暗い世界からだんだん明るい世界へと、みらびかれて來たのである。(明るい世界に)

必要は發明の母である。人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。(在現) しかし熱や光の作り方や利用の方法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。將

來は又どんなものが發明されるかも知れない。(將來その發)
(明者は誰)

第十六課 無言の行 (二時間)

無言を手段として、無我の境に至る修行をするのが無言の行である。四人の僧が七日間と期間を定めて、その行にかゝつた。ところがその第一夜に四人悉く口をきいてしまった。上座の老僧が「物を言はないのはわしばかりだ。」といつたのは笑話だが、その裏面には尊い教訓がこもつてゐる。この課は單に笑話として取扱つてもよいのだが、もしその奥にひそむ教訓に多少でもふれさせることが出来たら、大なる成功である。

笑話にこもる教訓は、人によつてその意義を異にするが、私は次のやうに考へてゐる。「人の心がもし明鏡止水のやうに平靜で、他の何物も之を亂すことがなかつたら、その上にうつる一切萬象の影は、少しの狂ひもなく、實相そのまゝであるべきだ。たとへば山は山川は川、美は美醜は醜であるべきだ。けれども、山を好むとか、

川を愛するとか、美がすぎだとか、醜がきらいだとかいふ一念が、その平静をかき亂すと、山川美醜の真相がたゞちに破られてしまふ。そこで一念の動きを無言の行でとどめて、常に平靜なる心を持続しようといふのである。七日間の無言、いかにもむづかしいことのやうだが、心だに平靜ならば、七日間はあろか、十日が一月でも無言であることは少しも苦しい譯がない。ところが境に應じて、動搖定まりなき心を持つて、この行にあたるとすると、七日はさておき、半日一日でも苦しくてたまらない譯だ。我が心の持方一つで、我等は忽ちに佛と同境の澄みきつた心を持つことが出来るし、又忽ちに悪魔と同境の濁つた心になつてしまふのである。要は境によつて動くか、動かないかの問題である。末座の僧は消えさうな燈に心動き隣の僧は末座の僧が口をきいた事に心動き、第二座の僧は二人の僧の行をやぶつたことに心動き、上座の老僧は物をいはない誇らしい心に心動き、失敗したのである。無言の行を何の爲に行ずるか、知らずして、たゞ人真似に四人はこれを行じてゐるのである。教訓としては、何事もその本旨に立つて行ずべきだといふこととだらう。私のたゞ今の境涯では、かうしか解せられない。他日我が境涯が進ん

で、これを至らぬものと見る日はあつても、それは私としては仕様のないことである。私が二十年にちかく信じて疑はない、自己をよむとは、かうしたことをいふのである。

これを取扱ふには、まづ一二回全文を通讀せしめて、山寺の一室一室内の座席等を想像させ、次に四人の心の動いたことを考へさせたい。次に四人のことはを聽寫させ、よく／＼境に對して動搖する心を見させたい。動搖する心を抱いて、無言でゐる事は苦行だらうが、不動の心には無言は當然、そこに無我の境地がある。この義をよく會得せしめたいと思ふ。

教材

或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。(ついで)
小僧一人だけ自由に室内に入出させて、いろ／＼の用を足させた。(準備はそれ)
夜が更けるにつれて燈がだん／＼暗くなり、今にも消えさうになつた。(燈を見る要なし)
末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。(だから修行をしてゐるではないか) うつ

かり口をきいてしまつた。(可惜)

「小僧早く燈心をかきたててくれ。」

隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、(おすけて)

「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。(がしやう)

「あなたがたはとんでもない人たちだ。」

三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、(それ)

(お前は罪がふかい)

「物を言はないのはわしばかりだ。」

第十七課 松阪の一夜 (四時間)

松阪に於て賀茂真淵と本居宣長の一夜の會見が生んだものは何だらう。古事

記傳だらうか。古事記傳はこの會見がなくても、宣長の手で必ず出來た事と思ふ。では何だらう。私は古事記傳によつて明かにされた我が國古代精神の研究ではあるまいかと思ふ。即ち宣長が真淵によつて、古事記を調べるについての眼を、この一夜に開いてもらったのである。よき師の學説をついだその一事だ。

この課は起筆に宣長の人となりをしてし、結尾にその偉業を以てした。中は三段にわかれる。即ち前記と本記と後記と見るべきかと思ふ。時は寶曆十三年五月(紀元二四二三年)宣長が松阪の日野町柏屋兵助といふ古本屋を訪うて、真淵の立寄られたことをきき、次の宿なる垣鼻村の先まで追つて、志を果さず、新庄屋に引返して、よく頼んでおいたまでが前記である。さて望が叶つて、真淵と宣長が孤燈の下に對座して古事記の研究について教をうけたのが本記ともいふべきところ、それは五月二十五日の夜であつた。翌年の春入門して、師弟の縁を結び、その後文通して教をうけたのが後記である。この課は本記に力をそぐべきはいふまでもない。その中でもことに古事記研究の着眼點、古代精神を求めるといふについて、十分の理解を得させたい。話の筋は全く奇遇、しかも道を求める者の上へののみ、こ

の一夜は恵まれるのである。その一夜に、たゞ淡意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。との一語を得たことが、宣長をして古事記傳に生きさせた譯である。こゝに着眼して取扱ふべきだと思ふ。

この課はまづ起筆と前記を兒童の自習にまかせて、本記の對座に一時間、古事記研究に關する教訓に一時間、後記結尾に一時間、全課をまとめて一時間、都合四時間かけたら十分である。

第一時には全課通讀、讀み得たところによつて、起筆、前記、本記、後記、結尾の五段に分れることをたしかめ、起筆前記を兒童の自習にまかせて、たゞちに本記の對座に入るがよい。「松阪の一夜」といふ題からいつても、こゝから入るべきだ。次に

二人はほの暗い行燈のもとで對座した。真淵はもう七十歳(六十七歳)に近く、いろ／＼りつばな著書(冠辭考、萬葉考等)もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘り(三十四歳)溫和なひと、なりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる篤學の(二十三歳より二十八歳まで京都に於て醫學を修めた。その間に僧契冲の著書を讀破した)壯年。年こそちがへ、二人は同じ學問の道

をたどつてゐるのである。(括弧の中は補説の要にとて)

を聴寫させ、この一夜の對座に恵まれた宣長の心からの喜と、後には真淵もよき後繼者を見出した心からの喜を考へさせたい。「同じ學問(皇國學國學)の道をたどつてゐるのであるといふに、天下に聞えた老大家と才氣のひらめいてゐる篤學の壯年とが、融合一體となる所に、何ともいへない味のあることを考へさせたい。これは道に志す者のみの悟り得るものかとも思ふ。

第二時は本記の中の本記ともいふべきもので、この課では山である。全課通讀、第一時の復習次に本日の問題、古事記の研究、即ち古事記の尊いところはその中にあらはれてゐる我が國の古代精神であることについて考へさせたい。真淵が萬葉集の研究で年をとつたことや、研究の順序に關する注意等は、それに附帶したものといつてもよい。傍線を施した語句を書かせ、我が國の古代精神を知りたいといふ希望。」に主力をそゝぐがよい。古代精神を説明しようとしても、それはむづかしい。私は之を取扱ふに、古代精神といふ語義から、現代精神といふ語を導きだして、現代精神には古代精神がそのまゝに傳はつてゐるもの、即ち忠孝や敬神崇祖

の念、清潔をたつとぶ風等のあることを知らせ、我々にも古代精神を多分に傳へてゐることから、その意義を考へさせるやうにする。

なほ古事記と萬葉集について、小倉百人一首の中の天智天皇持統天皇の御歌柿本人麿・山邊赤人等の歌や、國語讀本中の事實、天の岩戸・白兔・浦島太郎・八岐の大蛇等について、いかなる書であるかを考へさせたい。

なほ宣長のやうな感激を得た人の幸福、真淵もこの夜の感激に安眠の出來なかつただらうといふことを考へさせたい。

第三時は全文通讀、第二時の復習次に後記の全文

「其の後宣長は絶えず文通して、真淵の教を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松阪の一夜以後、とう／＼來なかつた。」と結尾の宣長の偉業を記したところ、

「有名な古事記傳といふ大著述は、此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。」

とを書かせ、前者にこもる師弟の間の情誼を考へさせたい。なほ「不滅の光を放つ

てゐる。」といふは「古事記傳が不朽の名著だ。」といふ義か、「古事記傳が我が國文學を照してゐる。」といふ義か、とにかく説くのに迷ふ所だ。佐々木博士の著「賀茂眞淵と本居宣長」には、今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、わが國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。」とある。参照して取扱ふがよい。

第四時には全文通讀、自習檢討の意で、起筆と前記をしらべ、宣長が眞淵の學風を慕つてゐたことを考へさせたい。次に本記と後記及び結尾の復習、記筆と結尾の照應等を知らせたい。眞淵が萬葉研究者で歌人、宣長は古事記の研究者で學者であることは、その山櫻の歌に見てもわかる。

うら／＼とのどけき春の心よりにほひ出でたる山櫻花 眞淵

敷島のやまと心を人間はば朝日ににほふ山櫻花 宣長

等によつてまとめたい。

参考

賀茂眞淵 元祿十一年紀元二三五八年に生る。父は遠江加茂社の祠官定信。通稱岡部衛士縣居と號す。京都に上り、荷田春滿について、國學を學ぶ。學成りて、江戸に出で教授す。田安宗武に聘せられて、國學の師となる。明和六年(紀元二四二九年)歿す。年七十三。縣居神社(遠江濱松)にまつる。松阪の一夜に同伴をしてゐた弟子二人、兄村田春郷は年二十五、弟春海は十八歳。

本居宣長 伊勢松阪の人。享保十五年(紀元二三九〇年)に生る。通稱舜庵、鈴屋と號す。國學四大人の一人である。一四大人とは荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤―享和元年(紀元二四六一年)六月歿す。年七十二。山室山神社伊勢松阪にまつる。

教材

本居宣長は伊勢の國松阪の人である。(醫業)若い頃から讀書がすきで將來學問を以て身を立てたいと、一心勉強してゐた。(志既に立つた)

或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行く、主人は愛想よく迎へて、「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀

茂真淵先生が、先程御見えになりました。」

といふ。(必ず恵まるものは)あまり思ひがけない言葉に宣長は驚いて、

「先生がどうしてこちらへ。」

「何でも山城大和方面の御旅行がすんで、(田安家の用命)これから參宮をなさるのださうです。(若人二人)あの新上屋に御泊になつて、さつき御出かけの途中「何か珍しい本はないか。」と、御立寄り下さいました。(奇縁)

「それは惜しいことをした。どうかして御目にかゝりたいものだが。(宣長には唯一人の)

後を追つて御いでのになつたら、大てい追いつけませう。」

宣長は大急ぎで真淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、(たにかつたか)松阪の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追いつけなかつた。宣長は力を落してすご／＼ともどつて來た。(見望しが如)さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知

らせてもらひたいと頼んでおいた。(せめてもの望)

望がかなつて、(神のみ)宣長が真淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。二人はほの暗い行燈のもとで對坐した。(感)真淵はもう七十歳に近く、いろ／＼りつばな著書もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳餘り、温和なひと、なりのうちに、どことなく才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。(客主)だん／＼話してゐるうちに、真淵は宣長の學識の尋常でないことをさつて、非常にたのもしく思つた。(感)話が古事記のことに及ぶと、宣長は

「私がかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。それについて何か御注意下さることはございますまいか。」

「それはよいところに気がつきました。私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望(この千金)から、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なこと出來ない。古い言葉を調べるのに一番よいの

は萬葉集です。(人歌)そこで先づ順序じゆとして萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。これは學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一步一步高く登り、最後の目的に達するやうになさい。(慈愛)夏の夜は更けやすい。家々の戸はもう皆とざされてゐる。(興趣)老學者の言に深く感激した宣長は、未來の希望に胸ををどらせながら、ひつそりした町すぢを我が家へ向つた。(感激は生命也)

其の後宣長は絶えず文通して眞淵の教を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松阪の一夜以後とうとう來なかつた。(師弟共に一目相見たかつたらう)宣長は眞淵の志をうけつぎ、(師弟一如)三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國

文學の上に不滅の光を放つてゐる。(偉人の偉績)

第十八課 貨幣 (二時間)

貨幣紙幣は實に便利なものである。しかし人間がこの便利なものを持つてゐなかつた時代がある。その時代には物々交換で、有無を通じた。それがいかに不便であつたらうかは、想像するに難くはない。自分の手に餘つてゐるものを持ち歩いて、他にそれを必要とする人を見つけるのが容易ではなかつた。よし見つけたとしても、その必要とする物が、その數量に於て相一致することが、さらにむづかしかつた。それが一致しても、持運びに骨がゐれた。その不便をいくらかでも軽減しようといふので、代表的の物を定めた。それが石、貝、家畜、獸皮、布、農産物等であつた。これにもまた幾多の不便があるので、つひに金屬をもつて貨幣を作り、貨幣に代る紙幣をまで案出するに至つた。社會が經驗を基礎としての一だ發明である。

この課は三段から出来てゐる。第一段は現行の貨幣と紙幣とその用を説いたのである。第二段はこの極めて便利な貨幣や紙幣に對して、吾人が更に意にとめてゐない事から、注意を喚起して、貨幣の案出を考へさせたのである。第三段は貨幣の役目をした物品から、金屬の使用、紙幣の案出を説いたのである。之を取扱ふには、第一段の現行の貨幣紙幣第三段のその變遷を主として、第二段はその兩者を結ぶものと見たらよからう。着眼としては物々交換の原始時代貨幣の役目をする代表的物品を定めた時代、金屬を以つて貨幣とした時代、貨幣と紙幣をあはせ用ひる現代を、次第に考へさせ、吾人の無意識な生活も、常に便利へ便利への創作的活動であることを考へさせたい。

第一時には全文通讀、次に第一段と第二段に傍線を施した語句を書かせ、現行の貨幣紙幣について、その經驗を語らせたい。そのうちに必ず二つの疑問が起らなければならぬ。即ちその一は銀貨、白銅貨、青銅貨は通用してゐるが、金貨は殆ど見ないこと。その二は紙幣に何故價值があるかといふことである。この二問題が貨幣と紙幣の意義を明かにすることになるから、その取扱をよろそかにしてはな

らぬ。金貨の流通しないのは、磨滅のおそれがあるからだ。紙幣に價值のあるのは、壹圓紙幣の表面には、此券引かへに銀貨壹圓相渡可申候也。拾圓紙幣にはその表面に、此券引換に金貨拾圓相渡可申候。と明記してあるからだ。――五圓以上の紙幣にはその金額だけ金貨交換のことが明記してある。――なほ、いろ／＼の用を辨じてゐる。といふ、いろ／＼の義は、給料の支拂や報酬や、利子の支拂等をいふのであらう。

第二段の其の使用になれて、感謝することを忘れてゐるのは、特に注意して取扱ひたいと思ふ。無意識でゐても、便利でないのではない。感謝しないのでもない。それは太陽の光線や空氣や水などについて考へてもわかる。時折はその本にさかのぼつて、貨幣のなかつた時代を考へさせることが肝要である。文化の進んだ複雑なる社會に生きる者は、時々その魂の故郷である原始時代を追想することによつて、豊かな人間味をさることが出来る。淨化もされ、感謝する事も出来る。こゝに國語教育独自の天地があるやうに思ふ。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第三段に傍線を施した部分を書かせ、貨

幣紙幣の出來た經過及び代表的物品の缺點、即ち耐久力の乏しいこと、分割によつて價值・生命を失ふこと等を知らせたい。

教材

我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨、白銅貨、青銅貨がある。これらを總べて貨幣といふ。又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。我々はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろ／＼の用を辨じてゐる。(善用するあり 悪用するあり)我々は殆ど貨幣紙幣なくして一日も生活することは出來ぬといつてもよいからである。(生きるも金 死ぬるも金)

此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。(本を忘るる 者はかり)しかし今日の貨幣や紙幣を案出するまでには、人間は實に種々様々なものを使用して見たのである。(歴史の 跡さ)

石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目を

したこともあつた。しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふやうに分割することが出來なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。(経験の ため)それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。(大發明)かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尙場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。(さらに 大發明)今では世界各國、貨幣紙幣を用ひない國はないのである。

第十九課 我は海の子 (二時間)

「我は海の子」の一語は、實に海邊に生活する若き者の誇を秘めた叫である。七番の歌すべてがそれである。この歌を讀む者は必ずしも海の子ばかりではない。山の子も讀めば、里の子も讀み、野の子も讀めば、町の子も讀む。海の子の誇を讀む

につけて、山の子も、里の子も、野の子も、町の子も、その生活に對する誇を見出すところ、この歌はいかなる人の上にも生きるものである。この一點に着眼してすゝめば、この課の取扱ひに狂ひはない。

(一)の歌はその住居についての誇である。大廈高樓よりもとまやをこそきはめてなつかしく思ふとの意である。(二)の歌はその生ひたちについての誇である。荒き風にもあてないやうにとはぐくまれるよりも、潮に浴し、浪の音に親しんで、すこやかに育つ者の心からの誇である。(三)の歌は自然の環境についての誇である。人はいその香をきらひ、松吹く風を意にもとめぬが、我にはそれが不斷の花の香りであり、いみじき樂であるとの意である。(四)の歌は遊び場についての誇である。我等はろかいをあやつつて海上をのりまはし、百尋千尋の海底にもぐつて遊ぶ。自由自在行くとして可ならざるなしといふ誇である。(五)の歌は海の子としてきたへあげたる身體についての誇である。鐵より堅き腕と、赤銅さながらのはだとは、海の子にのみ許されたものとの意である。(六)の歌は海の子としてねりあげた意氣についての誇である。北海の氷山、南海のたつまき、何どかおそれん、何どか驚

かんとの意氣である。(七)の歌は海に働く者の希望にかゝやく誇である。大船を乗出しては海の富を拾ひ、軍艦に乗組みては海國を護らうといふ誇である。與へられたる天地に安住し、その環境に自己を育てて、國家に奉仕しようといふ海の子の覺悟と誇、それをうたつたものである。

第一時には全文通讀、題目から海の子の誇を詠んだものである事をまづ考へさせたい。山の子、野の子、里の子、町の子、それ〴〵に我は何の子といふ誇のあるべき事などはせ考へさせて―次には(一)から(四)までの全文を書かせ、各番何を誇としてゐるかについて、文に即して考へさせたい。浪まくらとは、海の旅の意。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に(五)から(七)までの全文を書かせ、各番の誇について考へさせたい。即ち(五)はからだ、(六)は心、(七)は希望等、まとめて考へさせたい。與へられたる天地に安住する者のみ、この誇を感じ、この力を自覺するのである。この歌が誰の爲に書かれてゐるかなども、靜かに考へさせたい。

教材

(一)

我は海の子(この語)白波の

さわぐいそべの松原に、(砂白)

煙たなびくとまやこそ、

我がなつかしき住家なれ。(唯二)

(二)

生れて潮に浴して、(湯の味を)

浪を子守の歌と聞き、(子守の背)

千里寄せくる海の氣を(し清)

吸ひてわらべとなりにけり。(誇なき)

(三)

高く鼻つくいその香に、(避暑客はこ)

不斷の花のかをりあり。(我のみ)

なぎさの松に吹く風を、

いみじき樂と我は聞く。(我のみ)

(四)

丈餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、(由自)

百尋千尋海の底、

遊びなれたる庭廣し。(在自)

(五)

幾年こゝにきたへたる

鐵より堅き腕あり。(海の子)

吹く潮風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。(海の子)

(六)

浪にたゞよふ氷山も、(北の海)

來らば來れ、恐れんや。(この意氣)

海まき上ぐるたつまきも、(南の海)

起らば起れ、驚かじ。(この意氣)

(七)

いで、大船を乗出して、

我は拾はん、海の富。(事なき日)

いで軍艦に乘組みて、

我は護らん、海の國。(事ある日)

第二十課 遠 泳 (二時間)

この課の第一段、今日は始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。」といふ總叙は、いかにもうまくいひあらはしてある。全文を二

つにわけて見ることが出来る。それは疲れるまでと、疲れてからである。六段の竹島を越したところがその岐れ路だ。元氣旺盛、體力充實の間は、あたりの色々なものにも目がつき、口もきくが、疲れて來て、やつと體だけ浮けて行くやうになると、たゞ黙々たるのみ。さらに他人の激勵を力に進むやうになると、みじめなものである。しかし成功の叫は、残つてゐた元氣全部擧げての萬歳で、蓋し甚だ大なるものではなかつたらう。

遠泳の試練は單に遠泳ばかりではない。人間萬事此の如しで、苦しいのは最後の五分間である。そこに成敗が存するのだ。全力を盡してたふれてやむの一念が、常に成功の鍵である。こゝに着眼することが肝要だ。

第一時には全文通讀讀み得た所によつて、第一段の起筆(總叙)と第十段の結尾(成功を除いたら、六段を真中にして、前は元氣旺盛、後は意氣銷沈である事を考へさせたい。六段までに傍線を施した語句を書かせ、此の分ならば五海里や十海里は何でもない。」にこもる意氣軒昂、何だか氣持が悪いものだ。」にこもる餘裕綽々たるところを知らせたい。ここまでは總叙にこもる、何だかうれしいやう。」に感ずる

ところだ。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に七段以下に傍線を施した所を書かせ、元氣のにはかになくなつていくのをまづ自ら勵まし、次に他に勵まされ、又一しやうけんめいに泳いで行く。」といふ又の字がよく利いてゐる。次に、「とうとう大島についた。」の「とうとう」は意氣銷沈以來のすべての苦境を思はせる。「あゝ」といひ、僕もの「も」といひ、はじめておのれに歸つて、萬歳と叫んで、あとはぐつたり疲れたことだらう。瞬間の興奮はわづかに残つてゐた元氣かとも思ふ。それらをよくよく考へさせたい。

教材

今日は始めての遠泳だと思ふと何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

(初經驗)

空には眞夏の日がさらさら〜とかきやきわたつてゐる。砂の上を歩いて行くと、

足の裏が焼けるやうだ。(出陣の感)

手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。(準備)

やがて「進め。」の號令と共に、三十人の一組は二列になつて、順々に水の中へとはいつて行く。(彼功には)今日は殊に波も静かだ。此の分ならば五海里や十海里は何でもない。(意氣軒昂)

だん／＼沖の方へ進んで行くと水の色はものすごい程濃い紺色だ。波も追々大きくなつた。ふと見ると、さしわたし六七寸もある大きなくらげが、ふわりふわりと浮いてゐる。(餘裕綽々)

竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。何だか氣持の悪いものだ。(尚餘裕あ)

しかし又しばらくすると、もとの水の温度にかへつた。

手足が大分くたびれて來た。腹もすいた。(意氣衰ふ)その中、先に進んでゐた者が二人列から離れて船に上つた。(今は他人の事ならず)僕も急に元氣がなくなつて、一所に船

に上らうかと思つたが、いや、こゝががまんの上どころだ。そんな弱いことではだめだ。」と、自ら勵まして進んで行つた。(自力あり)しかし月島はなかなか來ない。

やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」

船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。(他力にすがつて)

目ざす大島はもうそこに見える。波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々」と叫んでゐる。(前途に近し)

とう／＼大島についた。(ゆめのやうに)

「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」(覺)

かう思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず「萬歳。」と叫んだ。(瞬間の興奮後はし力)

第二十一課 暦の話 (三時間)

昭和五年の本暦を取出して見ると、昭和五年暦と表紙に書いてあつて、その右肩

に「神宮」と朱印が押してある。その見返しには東京天文臺編纂と右に一行、真中に「神武天皇即位紀元二千五百九十年」と割書にして、その下に「昭和五年」と記し又その下に「平年庚午西暦一九三〇年」と割書にして、最下に「暦」といふ字が書いてある。その左一行に東京帝國大學と記してある。最終頁には昭和四年頒行。神宮神部署として朱印が押してある。これから考へると、暦といふものは東京天文臺の編纂で、神宮神部署の頒行である。略本暦には表紙に「昭和五年略本暦」と記してある。

暦に載せてある事項を見ると、まづ天文に關する記事、一日曜日干支通日月齡月出・月入・日出・日入・晝間・夜間・夜明・日暮・星座等——の確定的のことが骨子をなしてゐる。それは東京天文臺——東京郊外三鷹にあり——にて調査したるもの。次に中央氣象臺——東京市内一ツ橋にあり——にて調査したる氣象に關するもの。即ち氣壓・氣温・濕度・降水・風速度・霜雪の季節等がのせてある。なほ祝日・官國幣社の祭日・御歴代天皇について記念すべき日、昭和五年は醍醐天皇の千年祭の類——が記してある。その他八十八夜・彼岸・二百十日等、國民生活の上に必要な事項ものせてある。暦はかうした事柄の記載してあるもので、畏多くも上御一人より、下萬民に至るまで、い

かなる者にも重要な書類である。この重寶なる書類に親しむことによつて、我等の生活がいかに天文氣象の影響をうけてをるかをと、同時に宇宙に對する考もきまるものかと思ふ。

縁がはでの暦の話の座には、父と弟とこの文を綴つた兄とがゐる。弟は尋常四年生だらう。それは、おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。といつてゐるのから察せられる。それは七の卷の第二十一、二百十日のところにあるおぢいさんが、孫に話したことばであるからだ。父が略本暦を示し、通日によつて二百十日、八十八夜の日數調を弟にをしへてゐられるのを見て、はじめて暦と人生の關係をさと、さらに父の話によつて、暦の重要なものであること、太陽暦と太陰暦の二種あることをも知つた。父が最後の「寶の持ちくされだ。」といふ警告は、この兄をしてさらに暦の研究に努力せしめたことと思ふ。この兄の心の動きをたゞちに自分の行の上にはして、本暦或は略本暦について、實際の研究にすゝむまでに導きたい。眞の自學の興味は、かうしたところから起るものかと思ふ。

第一時には全文通讀讀み得たところによつて、大體段にまとめさせて見るがよい。即ち第一段は父が略本暦を示して、弟に二百十日と八十八夜の日數を數へさせたこと。第二段は兄が暦を研究的に見はじめたこと。―日出・日入・月齡(以上天文)各地の氣象(以上氣象)―第三段は太陽暦と太陰暦のこと。第四段は結尾である。次に第一段の取扱に入つて挿畫を觀察せしめ、これによつて次の式を書かせて、

245(二百十日の通日) - 35(立春の前日までの通日) = 210

123(八十八夜の通日) - 35(立春の前日までの通日) = 88

二百十日、八十八夜といふ義を知らせたい。二百十日に颱風の襲來すること、八十八夜に種をまくことは、幾十年の經驗から來てをることを考へさせ、天文氣象殆ど一系亂れぬほど確實なものであることを知らせたい。「略本暦」「通日」など、兒童の語としては縁遠きもの、特に注意して取扱はねばならぬ。

第二時は全文通讀、第一時の復習、次に第二段の傍線を施した部分を書かせ、暦の見方にはたらく見方とは、たらかなない見方のあることを知らせたい。はたらく見方とは、「日出」「日入」によつて晝間の時間を知り、それが氣候と關係あることを知らせ

るなどの類である。ことに大潮が新月と満月の時にあることそれが太陽及び月の引力が海水に作用してゐることを知る時、潮干狩のたのしさも、結局大宇宙の恩恵だといふことが思はれる。以上は天文に關する部分だが、各地の氣候や、雨雪の量など、氣象に關することも明かに知ることが出來て、旅行などの場合に便宜を得ることがきはめて多い。それらを知らせて、暦の研究活用を考へさせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習次に第三段に施した傍線の部分を書かせ、太陽暦と太陰暦の差及びその便否等について考へさせたい。一回歸年(春分から春分まで)夏至年(夏至から夏至まで)冬至年(冬至から冬至まで)恒星年(恒星をもととして定めた年)等色々の年があつて、それが一致しないから、暦として最も都合のよい一回歸年をとつたのである。なほ長い間の習慣、寶の持ちぐされについて、よくよく考へさせたい。なほ本暦、略本暦について研究の仕方を指導したい。ことに官國幣社の祭日等のかゝげてあるのは、我が國の暦の特色であることを知らせたい。

教材

夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。父は空をながめて、

「大層天氣がおだやかになつたね。二百十日もこれで無事にすんだ。」
と、團扇を使ひながら言つた。(五年の星の話のやうだ)すると弟が

「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」
と言つて、日數を數へてみようとした。(尋常四年生に)父は暦を持つて來て、

「これは略本暦だ。この中にある『通日』(ツウジツのあけ)で數へて御らん。これは一月一日から數へた日數だ。」

かういつて弟の手に渡した。弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ二百十日の通月から立春の前日の通日を引去つて、

「成程、二百十日目だ。」(減算式が)

弟は尙あちらこちら暦をくつてゐるうち、ふと「八十八夜」の文字に目を止めて、

「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

「それも立春から數へると八十八日目、稻をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。」(減算式が)
(たつ二)

僕はこれまで曆といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日土用彼岸入梅日食月食が何時になるかといふやうな事を見るものとはかり考へてゐたので、(はいたらきの見方)此の話を聞いて珍しく感じた。父はなほ言葉をつゞけて、

「曆を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。此の頃の日の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齢』を見る。(天文の研究)おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも『月齢』を見て知るので。(人間生活に深い關係に)

父は更に

「もつとおしまひの方をあけて御らん。『各地の氣候』といふ所がある。そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。それから雨雪の量は何處が一番多いか又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。(氣象の研究)もつとくはしいことは本曆を見るがよい。かういふやうに、曆

はわたしたちに日日の事を教へてくれる(よく生き)大切なものだ。」

僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。父は

「新は新曆、舊は舊曆のことだ。曆には太陽曆と太陰曆とあつて、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。(二種の曆)どうして太陽曆を用ひるやうになつたのですか。」

「太陽曆の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。太陽曆は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。其の間は約三百六十五日と四分の一だが、便宜上三百六十五日を一年とし、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。ところが太陰曆は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、通例十二箇月を一年とするが、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽曆とくひちがつて來て、三年になら

ないうちに一箇月の閏をおかなければならぬ。したがつて二百十日も太陽曆なら大がいに九月一日でちがつても一日ぐらゐるものだが、太陰曆になると三十日もちがふことがある。櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。こんな不便な曆でも長い間の習慣（人は習慣の前には盲目だ）で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。」

最後に父は

「曆は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないでゐるのは實の持ちぐされだ。」（手近なところ、大なる研究事項に）
と言葉をそへた。

第二十二課 リンカーンの苦學（三時間）

リンカーンは苦しい境遇にありながら、學を樂しんで勉めた。今の兒童は多く

樂な境遇にゐて、學を苦しとして勉めない。その差は何から来るか。學の眞の意義に觸れると觸れないからである。人は不思議なもので、苦しい境遇のものが眞に觸れ易くて、樂な境遇の者が却つて身にしみ難い。いづれが幸、いづれが不幸かは、にはかに判断し難いと思ふ。

リンカーンがケンタッキ州の片田舎の貧しい家に生れたといふ事が、苦學しなければならぬ根本の事情である。七歳の時インディアナ州に移つて、移住者としての辛苦を十分に嘗めた。しかし見落してはならない事は、移住の生活は心ある者にとつては、すべてが創造生活であることだ。貧しき移住者リンカーン一家の生活は、食物にもさしつかへた。したがつて學に志すことは全く出来なかつた。旅人から珍しい話をきいて、心をなぐさめたのが燃ゆる求智の願を生んだ。やつと入學が出来たが、學童としての境遇も極めて苦しかつた。一年足らずで學を廢して、仕事の餘暇に自學することとなつた。その一例としてワシントン傳を借りて讀んだ事があげてあるが、かうした境遇、かうした態度で、ワシントン傳に接したから、身にしみて讀めた譯だ。最後にリンカーンの總評がのせてある。「實に此の

少年時代の苦心のたまものである。」とある。その「苦心」といふに、深い味はひがある。——苦學となひのが筆者の深い注意だ——餘暇を見出すに苦心し、書を得るに苦心したなど、それが大統領となり、世界の偉人となつたものである。發動的の人でなければ、この苦心に徹し、之をよき境遇に轉ずることは出来ないと思ふ。

貧しき移住者の子にも、恵まれてゐた求知の念が、一年足らずの苦しい就學に、それが開發の端を開かれ、學校をやめて後も、苦心して餘暇を作り、ワシントン傳を耽讀して、その感化をうけた。リンカーンが人となつたのは、この少年時代の苦心のたまものだといふに着眼すべきだと思ふ。

第一時には全文通讀、挿繪にかゞやく人の光——あたりは見苦しいものばかり人の心を見ると光る——を見させ、讀み得たところによつて段を考へさせたい。

——第一段は起筆、第二段は移住者のをさない子としてのリンカーン、第三段は一家の苦しい生活と旅人の話に求知の念は動きはじめた。第四段はやう／＼學校に入る事を得て勉強した。第五段は一年たらずで學校を下つて、自學し始めた。第六段はワシントン傳を耽讀したのに、自學の様が察せられる。第七段は結尾で

ある。——各段一箇所づつ傍線を施した所を書かせ、リンカーンが苦學の様を考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に二三四段に括弧を施した部分を書かせ、移住者の生活、一家の暮し向、學習に關する心がけ等を十分に考へさせたい。貧しき者も幸なりといふ義に觸れさせたい。

第三時には全文通讀、第二時の復習次に五六段に括弧を施した箇所を書かせ、自學の態度ワシントン傳の耽讀、自分の不注意から生じた損害を、勞力によつて償つたその態度等について深く考へさせたい。ワシントンは米國第一代の大統領、幼時父の愛してゐる櫻樹を伐りたふして、正直に之を父に告げたといふので、兒童には知られてゐる偉人である。私に最も印象の強いのは、ある時黒人が途上ワシントンに會つて敬禮した。ワシントンもまた帽子をとつて叮嚀に答禮した。之を見てゐた白人たちは、大に憤慨して、その所行を責めた。するとワシントンは、君は私があつた無作法な黒人よりも、尙無作法であつてよいと思ふか。」と答へたといふことだ。これは黒人で博士となつたブーカイワシントンの自叙傳中ある話だ。

ジョージワシントンの面目が躍如として見える。これらも補説したらよいかと思ふ。

参考

リンカーン(一八〇九—一八六五)北米合衆國第十六代の大統領。ケンタッキーの農家に生る。一八二八年ニユールレアンスに赴き、始めて奴隷の状態を見て、感ずる所あり、爾來法律を研究し、後一時國會に入りしも、幾何もなくして退き、主として辯護士として力を振ふ。一八五四年奴隷問題起るや、奴隷虐使を痛撃し、六〇年共和黨に推されて大統領となる。こゝに於て南部の奴隷を使者せる諸州はゼファリソン、デービスを大統領に擧げて、北部と分離し、こゝに南北大戦役となり、北部遂に勝ちて、奴隷を解放す。兇漢の手に斃る。

教材

アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。(貧しき者も幸なり)リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、さしあたり家がなくてはならぬので、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。それは三方が丸

太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。(住者の生活は悉く創造なり)家が出来てから次に土地を開きにかゝつた。リンカーンは其の頃からも父の手助をしなければならなかつた。(父が木を伐れば自分は雜草をかり取る。父が畠を打てば自分は種をまく)といふ風にかひがひしく働いてゐた。(自然の教育)

一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、時には生のじゃがいもしか食はれないこともあつた。かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出来なかつた。唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。(求知の念)かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよい(父の無理解ばかりでもあるまいか)といつて、なか／＼許してくれなかつた。ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来た。(繼母であるが賢明な人)の

で、リンカーンの喜は一通りでなかつた。學校は四哩餘りも離れてゐたが、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにして置く。(學用品) かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。(學に見付けた) しかしせつかく始めた學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。(大苦) それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりするところになつたが、本を読みたいといふ心は少しも變らなかつた。(時を見出) ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。(書を見出) 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず、借りに行つた。さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。(尊い) かうしてイソップ物語やロビンソン、タル

ソーや合衆國史等を讀んだ。

或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。(心の) 晝の仕事の合間に讀むのは勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。(自己を) ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。リンカーンがふと目を覺した時はもう遅かつた。壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して其の晩はとう／＼眠れなかつた。(責) 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、

「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい」と願つた。(ワシントンでもこの場) 其の人は別にとがめもせず、願に任せて三日間、畠の草をとらせ、さうして本は其のまゝ、リンカーンにやつた。(リンカーンの) リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度も／＼讀返してゐるうち

に、此の偉人の品性に深く感化された。(書はかく讀むべきもの)

リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を続けた。(身は一つにしてなき) 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

第二十三課 南米より (父の通信) 四時間

南米ブラジルよりの父の通信四つを集めたのがこの課である。こゝで第一の問題となるのは、父の視察である。移民のためか、貿易のためか、他に何か目的があつてか。それにはかに判断は出来ないけれども、三と四の手紙から見ると、たしかに移民のための視察である事が察せられる。まことに南米と我が國との關係は、移民が最もおもなるものであらう。サンパウロあたりに日本が移民を企てたのは、二三十年來の事だらう。着々南米に日本人の新社會を建設して、人口過剰の國家的大問題の解決にそなへてゐる。かうした事情の上に、この四通の手紙をな

がめる時、この父は單にこの手紙をうけとつた學童の父ではなくて、國の學童全部の父と考へたがよいと思ふ。

父が日本を出て、赤道直下を過ぎて殆ど二ヶ月、リオデジャネーロ市については、早速安着の報があつた事と思ふ。家にゐる二人の子は、父のことを思ひつゞけて、時折自分等の生活、一家の様子、國のうちのかはつた事など報じてゐただらう。いかに海山何萬哩を隔ててゐても、心は通じ、手紙は通ふ。それに對する父の手紙即ち二人の子にあてた第一信は、ブラジル總論ともいふべきものだ。その二は繪葉書を蒐集して、それを送るのに添えた手紙で、主とする所は小包にあるのだ。しかしアマゾン河とイグアッスの大瀑布は、いかにも大陸の大を語つてゐるものともいはれる。その三は四通の手紙の中の眼目ともいふべきもので、日本の學童、少年の活動を主として記した所は、感ことに深い。その四は大人の活動、開墾の實況を書いたもので、かくして海外に日本人の社會建設に努力してゐる次第を知らせたものである。四通の手紙を通じて、南米ブラジルの大體を知らせると共に、稚き者の行くべき天地を知らせるのが眼目である。

第一時には全文通讀、四通を通じてながめる時、一はブラジルの概略、二は繪葉書にそへた手紙、三は我が移民の活動、幼少年に關するもの、四は移民の活動、大人に關するものである事を考へさせ、次に一の文を通讀、さらにそれを前文、リオ、デ、ジャネーロ市の文化、ブラジル國の廣さ、氣候等が書いてあることを知らせ、問題として殘る日本と季節の相反する事を考へさせたい。次に傍線を施した部分を書かせ、勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。にこもる南米視察者らしい感想を知らせたい。(身體が資本といふ義)「文明諸國の大都會に比して、少しも劣る所これなく候。」は抽象的の書き方、内容を明かにしなければならぬ。「唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に、季節の相反する事に候。」には何故にといふ疑問の眼を開きたい。解決は必ずしも今之をするには及ばぬ。「御注意なさるべく候。」これなく候。「これあり。」等候文特殊の用法を知らせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第二の手紙の傍線を施した部分を書かせ、此の手紙と一しよに云々。」とあるに、父のいそがしさを考へさせ、河の大なるは國の大なるを意味し、瀑布の大なるは水量の多きを意味することを知らせたい。

なほ略「東京豊橋間云々。」「其の壯觀云々」といふ、共に表現の一工夫であることを知らせたい。なほこの時間は少し餘裕があるから、第一時の

其の大部分は熱帶
中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、殊に温帶に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日候由に屬し居候へども、本の如くはつきり致居

の書分をして、候由の意義、及びその響く所を考へさせたい。

第三時には全文通讀、第二の復習、次に三の手紙中、傍線を施した部分を書かせ、日本人の最も多く住める。」は、明治四十一年に七百八十名を送つたのを最初として、サンパウロ州政府と移民會社との契約で、繼續的に移民したからである。またコヒー園の労働者としては、日本人は手先が器用なだけに、園主に喜ばれる。「十三四ばかりの少年が、労働の競争場に立つて働いてゐるのを歎美したのは海外に於ける日本建設者として心強く感じたのである。これらについてもよく考へさせたい。

第四時には全文通讀、第三時の復習、十の卷の開墾の課を思ひおこさせて、南米開

聖の様と比較して考へさせたい。四の手紙中傍線を施した部分を書かせ、それについて南米開墾は勇ましく勇まじき仕事の一つであることを知らせたい。ことに日本の人口問題の上から、大なる國家問題の一つであることを考へさせたい。なほ全文を通讀せしめて、父のその子に報じる親心と、ひいては少國民全體に呼掛けてゐるやうな感のする所を明かにしたい。

教材

一

御手紙拜見致候。二人ともよく勉強し居らるる由、安心致候。勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。(南米を見た父らしい注意)

目下滞在中のリオデジャネーロ市は、ブラジル國の首府にて非常に景色よく、港としても有名なる處に候。町のりつばなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。(街路衛生交、通通信等) 此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の

大半は割合に涼しく、殊に温帯に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、唯をかしくは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。(研究を要する大問題)

二

此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。其の中に有名なアマゾン河や、イグアッスーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、略東京豊橋間の距離に當り候。(親切なる表現) 次にイグアッスーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。(盡し難しといふが盡したことになる)

三

二週間ばかり前より西方のサンパウロ市に參り居候。此の邊は南米中、日本

人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。(日本の移住地) 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學して居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。(南米に生れて南米に人となる我が同胞)

世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗綿花米等もよく出来る由に候。(車) 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、(日本人に適する労働) 之を集めてみぞに投入れ候へばまじりたる石砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。之を機械にかけて皮を除き、袋(五斗五)に入れて外國に輸出する由に候。

コーヒー園には多くの日本人が働き居候。中にも十三四ばかりの子供(ひとりには既に一人前) が、各國人の間にまじりてかひなくしく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。(人間到處有青山)

四

森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。(人を持つてふる土地) 原野は大きい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草灌木など思ふまゝにはびこり居候。(熱帯の森林) かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇まじきものに候。(第一線に働く人)

先づ柄の長さ一間もあるなたにて灌木を伐拂ひ、次にをのを振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひききを打つて倒るゝ様、壯快言語に絶し候。(處女地の開墾) 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。(すべて大規模燃えあとは取片付けて畠とし、コーヒーわたの木などを植付け申候。身を殺して仁をなす人)

ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。(父をまつ子お土産話をまつ子)

第二十四課 孔明(三時間)

諸葛亮字は孔明は、支那三國時代の蜀の名臣である。三國時代とは魏蜀吳の三國が相對峙して、支那を統治してゐた頃のこと、我が國では神功皇后御攝政の時代である。紀元八百七十八年頃——孔明そのはじめは三國のいづれにも屬せず、襄陽にかくれて、悠悠自適、耕作に従事し、古人を友として、楽しく暮してゐた。劉備その賢をきいて、三度其の廬を訪ひ、まことを捧げて之を迎へた。孔明その知遇に感激して、許すに身を以てした。蜀の臣となつたのはこれからである。劉備に仕ふること十六年、劉備の崩ぜられた後、その子劉禪に仕ふること十一年、前後二十七年、誠意赤心、たゞ蜀のために盡して、年五十四で、魏と對陣中にたふれた。最初備にまみえた時は、まだ二十七歳の若年、而も四十七歳の劉備が三顧して、これを迎へた程の偉人である。

孔明が我が國の小學教材として選定せられたのは既に古いことだ。それはその一代の行動が、我が國民性の發達に大なる影響を與へてをるからだ。漢末亂離のかの時代、至誠一片たゞ睿智のかゞやくがまゝに行動して、牢として人間の踏むべき道を示したのは三國鼎立の策よりも、天下統一の謀よりも、日月と共に光をあらそふ程の貢獻である。

魏には曹操といふ英傑がゐた。吳に孫權といふ英雄がゐた。その下にはそれ／＼名將賢臣もあつた。けれども至誠後世を救つた孔明に敵する者は一人もない。我が國民に薰花を及ぼした程の者は一人もない。それを思ふと、道の光は極めて尊いものに思ふ。私は幼時から孔明を異國人と思ふやうな感は少しもなく、楠公孔明と一つに考へる程の親しさを持つてゐた。指導する者がさうした心持を以つて、之を取扱ふことが大切である。

以前の讀本には、四時間かゝつても取扱ひかねる程の散文で書いてあつた。ところがこの讀本には、四番の歌に一生がうたつてある。史實を知らうといふには、散文によるのがよいが、孔明の光や、にほひに觸れようといふならば、この歌で十分である。兒童にも至誠に徹した孔明の光を仰ぐことによつて、満足せしめなければならぬ。

この歌四番ともに第三句目に重きをおいてあるやうに見える。即ち一番はうき世をよそなるしづけき住居のさまである。二番は劉備が三顧のこよなき知遇に感じての出慮である。三番は蜀漢の國のいしずゑを固めたことである。四番は三軍を進めた五丈原に於ての最期である。要するに孔明の一代である。多少の補説は試みるとしても、史實よりもその氣分に觸れさせることが眼目である。

第一時には全文通讀、次に一番が住居、二番が知遇、三番が蜀漢の國を立てたこと、四番が最期である。即ち孔明一代のことであることを考へさせたい。次に挿圖の觀察からはいつて、始にある繪と終にある繪が續きであるか否かを考へさせると、心なき兒は別のものといひ、文に讀みひたつてゐる者は續きだといふ。勿論これは劉備が三顧した中の二顧目、雪降りみだるゝ冬のあしたの繪である。一顧の時には留守のためにあはなかつた。この二顧目には弟の均が逢つて、孔明はあはなかつた。三顧目には孔明の午睡してゐるのを、備は廊下に立つて待つた。このこよなき知遇に感激して、我が身をすてて報いんと決心したのである。挿圖の前なるが關羽で、中なるが劉備、後なるが張飛である。三人は約して兄弟となつた間

柄である。いづれも武勇にすぐれてゐるが、參謀に人を缺いてゐるのが、この一黨の弱點である。次に、この住居にをる人はといふ問から、孔明がまだ二十七歳の若年であること。道なき世をさけて、古人を友として道を樂しんでゐる事を考へさせたい。

次に一番二番の全文を書かせて、「白雲いづゝ去り又來る。」は自然のまゝにといふ感を伴ひ、西窓一片殘月あはし、靜寂にして而も求むる所なき感を伴ふ。即ち住居のさまにも孔明の心事さながらの表現である事が考へられる。したがつて「うき世をよそなる義が内からも外からもゆたかになつて來るかと思ふ。而して出でては日毎烟をうちてその食を得、入りては机に書をひらいて古人を友として道を樂しんでゐる。餘談ながら孔明はこの田畑を最後まで所有してゐて、最後はこゝに歸らうと心がけてゐたらしい。天下三分の計を立てて、蜀の獨立をはかつた時も、強敵ひしぎて世をしづめんと、天下の統一をはかつた時も、要は白雲悠悠去り又來る。西窓一片殘月あはしといふ心持であつたのであるまいか。孔明の偉業の光は、最初二句からさして來るやうに思ふ。

二番は孔明が劉備の知遇に感じて、我が身をすてて報いんと決心し、起ちて草のいほりを出て軍師となつた。こゝに問題は、孔明と頗る相似てゐる我が楠木正成は、笠置山から御醍醐天皇のお召にあつて、たゞちにはせ參じた。「正成生きてありときこしめさば、御心を安んぜさせたまへ。」と言上して引下つた。ところが孔明は三顧によつて立つた。而も劉備がぢき／＼のお迎である。頗るその趣を異にしてゐるやうだが、要は國體の差であらう。我が國はお召がなくても、馳參すべきが君臣のまことで、彼の國は三顧をまつて後でも、おそしといふべきではあるまい。これらも取扱上注意を要することかと思ふ。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に三番四番の全文を書かせて、天下三分の計を考へさせたい。北に魏あり、東南に吳あり、國を建つるとせば、地を西南に選ぶべきことは、孔明ならずとも見易きことである。孔明がこゝに着眼して、蜀漢建國の大業をなし、劉備をして帝の位をふましめたものは、孔明一代の偉功である。而もその心は常に至誠の上にあつて、一點の私もない。時に成敗利鈍はあつても、それがために孔明の光の少しも失せないのは尊いことだと思ふ。

劉備在世の十六年は、いかに苦しくても、その中に自ら慰さむるに足る得意なふしがあつた。けれども昭烈崩ずるにのぞみ、我が子助くべくんば之をたすけよ。もし不可ならば君自らかはれ。」と孔明にいつたのでも、劉禪の如何なる人であるかが察せられる。之に對して孔明が「臣鞠躬力を盡して、死してのちやむ。」といつてゐるその心事の透徹清明なことが思はれる。また昭烈がその子に教へて、孔明を見ることなほ我を見るが如くせよ。」といつてゐる。以つてこの間の消息をうかゞふのに十分だ。

昭烈皇帝のなくなつた後の蜀はむづかしかつた。孔明はあつても、外に大敵をひかへ、内には目の放し難いことばかりだつた。前後出師の表はこの間の苦衷をよくあらはしてゐる。孔明としては昭烈の遺志をつぎ、天下の統一を志して進む外に道はなかつた。五丈原に司馬仲達と對陣した時は、孔明は勝敗を一舉に決しようとし、仲達はつとめて戦をさせた。孔明が進めば、仲達は退き、孔明が退けば、仲達が進む。まるで暖簾とおしあひだつた。そこで孔明は婦人の被服を送つて、そのいくぢなさを嘲つた。けれども些の手ごたへもなかつた。私はひそかに仲達

も自己を知る偉人だと思ふ。孔明にむかつて萬全を期するならば、この外に道はあるまい。使者が仲達の陣中に到ると、必ず孔明の起居食事を問うた。ある時使者が務多くして食の少いことを語ると、仲達完爾として死のまさに近きことを喜んだ。對陣してゐる敵將の死するをまつといふ氣永い戦法があるだらうか。しかし仲達の先見的中して、孔明は陣中にたふれた。仲達は孔明の軍が退却するのを見て、鼓をならして追撃すると、蜀軍はこれを邀撃する氣勢を示した。仲達驚いて、「これも亦孔明の謀であつたか。」と追撃をやめて、遠く走つた。時の人、死せる諸葛、生ける仲達を走らす。」と惡口すると、仲達は「我れよく生を知る。死をはかる能はず。」とへらず口をたゝいた。とにかく魏の天下を奪ふ程の傑物。孔明の清は仲達の濁に對して、いよゝゝその清を加へることを思ふ。

孔明の死はいかにもはかなく露と消えたといふ感じだ。草廬の三顧に感激して起ち、五丈原の三軍中に死んだ。清き生活の二十七年、報いられる所もなくはかなく死んだ。白雲の悠々、西窓一片の残月に比すべき静寂恬淡その上に彼は一身をさゝげて働いた。悔も恨もあるまじ。たゞはかなしといふ語があたつてゐる。

る。しかしその名は萬世に輝いて、人の心に尊き教訓を與へてゐる。我が國民性が孔明の清き一生によつて培はれたことの大なるよしを考へさせたいと思ふ。

教材

白雲いよゝゝ去り又來る。(自然の姿)

西窓一片残月あはし。(静寂恬淡)

うき世をよそなるしづけき住居。(晏如)

出でては日毎烟を打ち、(生を支ふるに足る)

入りては机に書をひもとく。(古人を友として)

雪降りみだるゝ冬のあしたに、(求めざるに來る)

風なほ冷たき春のゆふべに、(求めざるに來る)

劉備が三顧のこよなき知遇、(求めずして顧みざるよかたじけなさ)

我が身をすてて報いんと、(誠至)

起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。(蜀は強しは)

天下を定むる三分の計、(大勢)

たなその上に指さすがごと。(成功)

いしずゑ固めし蜀漢の國、(は安し)

漢中王はおごそかに

帝の位をふませ給ひぬ。(統一の責任 双)

二代の帝に盡くす真心、(萬世に輝く)

強敵ひしぎて世をしづめんと、(照烈の遺志)

三軍進めし五丈原頭、(時非なるか運)

はかなく露と消えしかど、(嗚呼)

其の名はくちせず、諸葛孔明。(我が國民性)

第二十五課 自治の精神 (二時間)

人間に自治の精神といふものが特にあるのだらうか。自治團體に属する人々が、至誠事にあたるといふ以外に何物もあるまい。何處の學校にも上級生が自治會を組織してゐるが、會議をしたり、討論したり、決議したり、實行したりするのは末梢のことで、一級一心になつて働くのが楽しい、道に立ち得たといふ安心が得られるのが根本だらう。自治の精神も全くそれだ。これを功利の立場から考へたら浅いものになつてしまふ。團體の幸福を進めるのも、國運の發展を期するものも、それが楽しい、安んずることが出来るといふのでなければならぬ。

この課は通讀すると、精神とはいひながら、輪廓を書いたもののやうな感がする。随つて團體の幸福とか、國運の發展とか、協同一致とか、地方公共の事とか、目うつりのするやうな事實が多くかゝつてある。大人でもさういふ風に感じるのだから、兒童にはなほさらだらう。選挙といひ、事務の處理といひ、豫算を議するといふも、至誠事にあたる外に、何物もないことを考へさせたい。この一心の狂ひをいまし

めた一段もあるが、これはたゞ注意を與へたといふ位にとゞめたい。自治團體の圓滿な發達は、自治團體員各自の自覺にもとづくもの。その自覺は行ふといふことによつて、次第に自得するものであることを考へさせて、一村の生活、一町の生活乃至市府縣一團の生活も、要は自己完成の修行と考へる外に道なきことを考へさせたい。こゝに着眼してはじめてこの課に教育的意義が加はるかと思ふ。

第一時には全文通讀、次に題目から自治の精神は一身一家一町村一市一府縣一國一貫したるもののある事を考へさせ、次に第一段第二段に傍線を施した箇所を書かせ、自分の屬する團體を考へさせたい。次に自治の精神が誠意その團體のために盡くすより外に何物もなきことを考へさせたい。それが選舉にも、事務を處理するにも、豫算を議するにも大切なことであることを知らせたい。こゝに注意を要することは、團體のために盡くすといふことである。團體のためにといふといかにも他のためにすることのやうに思はれるが、何ぞ知らん、それが自己に於ける最上の満足であることを考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習、次に第三段第四段第五段に傍線を施した部

分を書かせ、代議政治に意義あらしめるも選舉人にあること。自治團體の各人が自覺し、修行することによつて、自治團體の發達することを考へさせたい。最後に「制度を運用するのは人である。」といふについて、道を行ずる人によつて、はじめて自治制は完全に運用せらるゝことを考へさせたい。こゝに注意を要することは、一般の人民の後援とある、後援といふ語についてである。この文の用語は、とかく何を如何にといふやうなきことがあるが、それは大なる間違ひで、大磐石の安心を得ようといふには、後援などいふなきぬるいことではだめだ。協力すべきものとの自覺或は自信といふべきである。もしこの文章に取扱ひにくい點があるとしたら、それは他に目がついて、至誠に落ち難いからである。

教材

我が國の地方自治團體には、府、縣、市、町村の別がある。(我はそのいづれに屬するか)其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、地方自治の精神に基づいて、其の團體の幸福を進め、國運の發展を期す(目的)ることは皆同じである。

一體自治の精神とは何であるか。地方人民が協同一致して自ら地方公共の事

に當り誠意其の團體の爲に力を盡くす精神(要は至誠)が即ちそれである。此の精神は實に自治の根本であり、又其の生命である。一般人民が府縣市町村會議員を選挙するにも、府縣市會で參事會員を選挙するにも、市町村會で市町村長を選挙するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。(蛇足に)又市町村長が其の事務を處理するにも、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。(似たり)

市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きを置いて、決して親族縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。(これをぬめなければならぬとはあさまし)まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、自治の精神に全く反するものである。(知らないのにはあるまい)本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を舉げることだけを考へて、決して私心をもたないものである。(舉が有意義)

公吏議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、一般の人民の後援(自治團體の一員であるといふ自覺)がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。それであるから人々は常に自治の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。例へば教育衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に舉げることが出来る。又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等を務めたりするのは、皆公共心の發動(行ずれば)であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。制度を運用するのは人である。自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれない。(人を外にしては何物もなし)

第二十六課 ウェリントンと少年 (二時間)

少年の美譚として、少年を主とするならば、ウェリントンは少くとも題目には不用である。もしまたウェリントンを主として、その寛容をたゞへるのならば、少くとも題目として少年は不用である。ところがウェリントンと少年として、對等に取扱つたところに深い意義がある。少年は騎馬の一隊にたてついてゐる。それは父の命令を完全に遂行せんがためである。道に立つての行動であるとの自信が、騎馬の一隊に對抗してゐるのである。最後にウェリントンが出て、少年をなだめようとした。ウェリントン公爵ときいて、心には十分尊敬しながら、道にそむけ—父の命にそむけ—といふ非理を詰つた。ウェリントンは道をかゝげての少年の詰問に共鳴して、部下を率ゐて去つた。少年美譚である。ウェリントン公爵の美譚である。而もその美であるところが、共に道を仰いでゐるところにある。こゝに着眼して取扱へば、道は位置の高低や老少の差によつて狂ふものでないことがわかる。第一時には全文通讀、題目によつてウェリントンと少年の上に道のかゝやいてゐる

ることを見させたい。次にウェリントンが出て少年をなだめようとする所まで、道の光のあらはれてゐるところを書かせて、

「ジョージ早く行つて農場の門をしめろ。人が何と言つても決してあけるな。」に二つの命令が含まれてゐること。即ち一つは門をしめる事、一つはそれを堅く守つてあけない事である。父の命を遵奉してゐるといふ安心は、この少年を勇敢にした。

「僕はおとうさんから誰が來ても此の門をあけてはならない。」と言ひつけられてゐるのです。」

と父の言をふりかざしてゐる。而して強迫に對しても懐柔に對しても依然として、

「おとうさんは。「誰が來ても、此の門をあけてはならない。」と僕に言ひつけました。」

といひきつた。前者は少年自分を主としていつてゐる。後者は父を主としていつてゐる。正をふんでおそれざるの意氣は、少年のほこりではあるまいかと思

ふ。

第二時には全文通讀第一時の復習次に二重傍線を施した部分を書かせ、三度くりかへして

「僕は誰が来ても此の門をあけてはならない。」とおとうさんに言はれてゐるのです。

とまづウェリントンの弱點をついておいて、言ひ張つた勇敢さを知らせたい。至誠父の言を遵奉する者でなければ、弱點をつく第一義の語は容易に出ないことを考へさせたい。最後の

「ウェリントン公爵萬歳。」

はウェリントン公爵の道を重んずるがために、行き詰らうとしてゐた道が弘通した喜の聲である。それをよく考へさせたい。

参考 ウェリントン公爵西暦一七六九年に生れ、一八五二年に死す。英國の將軍にして政治家である。印度に戦功あり。一八〇八年以來、大陸に赴き、屢々ナポレオンの軍をやぶり、一八一五年歐洲聯合軍に將として、又ナポレオンをウァー

ターローに破る。功を以つて公爵をたまはる。一八二八年總理大臣となり、舊教徒放釋令を發布す。

教材

昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

(平野の)

ふと向ふを見ると、銃獵に出たらしいりつばな騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。(突發の)農場主はせつかくよく出来てゐる麥をたくさんの馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、(彼は遊獵)そばに居た自分の子に、「ジョージ、早く行つて農場の門をしめる。人が何と言つても決してあけるな。」

(道こゝにあらはる)

と言ひつけた。

ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早い騎馬の人たちももう門の外まで乗りつけた。(馬の息)さうしてジョージに早くあけて通すやうに

(公爵を笠に着て)と言つた。するとジョージは、

「皆さん此處は通れませぬ。(拒絶) 僕はあなたから誰が来ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。(道をか) と言つてどうしてもあけない。騎馬の人たちはあけないとなぐるぞ(強)と言つておどしたり、あけてくれればお禮に金貨をやる(柔懐)と言つてすかししたりした。

ジョージは依然として、(敢勇)

「あなたさんは、誰が来ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。(道をか) と言つて」

とくり返すばかりであつた。最後に目つきのやさしい老紳士が言つた。

「私は公爵、ウェリントンだ。よい子だから私の頼をきいてくれ。(なだめ)

ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、帽子をぬいで恭しく敬禮して、(禮は)さて静かに口を開いた。

「ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、あなたさんの言ひつけに背けとおつしやうとは、どうしても考へられませぬ。僕は、誰が来ても此の門をあけてはならないとあなたさんに言はれてゐるのです。(道は)

公爵はひどく此の答が氣に入つた。(相通ふ) さうして自身も帽子をぬいで答禮し、(容寛) 一同を引連れて立去つた。

ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

「ウェリントン公爵萬歳。(道の弘通) したる喜)

第二十七課 ガラス工場 (二時間)

机上のインク瓶を見ても、卓上のビール瓶を見ても、その故郷を思ふ時、どこかのガラス工場を思ひうかべない譯にはいかない。その工場の様を書いたのがこの文である。原料を調査するところ、熔解窯加工場を経て、出来上るまでを知らせる

のが第一の着眼点である。更に見地を異にして、之を人間の職業として見る時それ／＼特殊の技術者は、その場／＼で光つてゐる。その光が相合して、陳列棚の光となり、お得意の注文となり、需要者の歎美となる。之が第二の着眼点である。

第一時には全文通讀、身邊にあるガラス器の故郷として、ガラス工場を考へさせたい。次に單傍線を施した部分を書かせて、ガラス器がいかにして作らるゝかを考へさせたい。

第二時には全文通讀、第一時の復習を終へて、二重傍線を施した部分を書かせ、着語を参照して、これ等の従業者を單に勞働する者と考へないで、創作者、その工夫によつて一つ／＼精巧に進むことを考へさせたい。要するにガラス工場は分業の理によつて、大きな創作に従事してゐるものともいはれ、職工の態度如何によつて、工場の盛衰を來すことも考へさせたい。營利の仕事のやうで、その及ぶ所のきはめて廣いことを思はせたい。第一時の取扱と第二時の取扱が相まつて、この課はふつくりと讀むことが出来ると思ふ。分業の課の復習と併せて取扱へば、効果は更に大であると思ふ。

教材

昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。

(工場は活書也)

最初にはいつたのは原料を調合するところで、マスクをかけた職工が珪砂にソ
 ーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。シャベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。(奥へた
 處) 次の建物にはいると、こゝには、熔解窯がある。とけたガラスが中でぎら／＼かがやいてゐる。窯の周圍には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。(これも
 いはな) 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。一端に口を當てて息を吹きこむと、ぶうつとふくれる。ふり動かしては又吹く。いよ／＼大きくなる。まるであめ細工のやうである。見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。(一がつ／＼が創作だ) こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。何が出来るであらうかと思つて

ゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。(これも) 實にうまいものである。

橋本君にうながされて、次の室にはいつた。こゝは加工場である。調べかほの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。エプロンをかいた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、みがきをかけたりしてゐる。(これで賣品になる) 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。(これもまた) 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。皿コップをはじめ、鉢びん花びん、水さしなどがきれいに並んでゐた。取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤黄、紫、緑とりどりに目もさめるばかりであつた。(總力の)

第二十八課 鐵眼の一切經(三時間)

一切經とは印度では、釋迦が一代に説法したといふ經典の總稱であるが、支那や日本では、印度撰述の律論の外、三國高僧の作れる論釋をも含めていつてゐる。藏經又は大藏經ともいふ。日本では徳川家が僧天海に命じて出版させたのがはじめで、鐵眼のはその次である。即ち鐵眼の一切經と題する意がわからう。支那版の一切經、高麗版の一切經、幕府の一切經、鐵眼の一切經、而も鐵眼のは三度目に出来た一切經といふ義もあつて、かた／＼教材として尊い譯だ。

鐵眼は一切經を刊行するについて、多大の苦心を重ねたことはいふまでもないが、あつめた資金を二度まで散じて、大阪の出水と近畿の飢饉をすくつてゐる。鐵眼の尊いところは一切經の刊行でもあるが、それよりも人の難儀をよそに見てはゐられないといふ慈悲の心ではあるまいかと思ふ。鐵眼は天昭二年—紀元二三四二年—年五十三歳でなくなつた。一切經の出来上つたのはその前年だといふ。十七年を費したといふから、三十五六の頃から着手したものと思はれる。三十五六といへば、資金の募集に骨の折れたらうといふ事は想像に難くはない。宇治の口碑に傳はつてゐる話に、鐵眼がある正月の二日、喜捨のうけぞめに、京都三條大橋

の西のたもと、雪の一面に深い、叡山嵐のはげしい中に立つて、左手に鐵鉢をさし、右手で拜しながら讀經して、人の來るのをまつてゐた。そこへ通りかゝつたのが馬上の武士である。身分ある人と見えて、身なりがいかめしい。しかし一僕をもつれてゐない。鐵眼は武士の近づくをまつて、進みよつて喜捨を乞うた。武士は縁起が悪いと思つたのか、うるさい。といつた。しかし鐵眼はこれが今年の喜捨のうけぞめである。よしうるさいといはれても、この武士から一厘の喜捨が得られぬほどならば、我が一切經の開版もおぼつかないと思つて、左様でもございませうが。と右手で手綱を捉へた。すると武士は無禮者。といつて、鞭でその手を打つた。さらでだに凍らればかりの冷たさ。むごくもうたれた鞭のあとは、皮が破れて、血がしたゝつた。武士は馬に一むちくれて、東へ東へと走る。鐵眼はこれを追つて、大津街道を三里、つひに大津の町についた。武士は大津のさるお茶屋に遊びに來たのであつた。馬から下りて、庭の木に馬をつながうとしてをる所に、鐵眼はやうやう追ひついて、たゞ一文の喜捨をと鐵鉢をさしだした。武士もその根氣に驚いたが、さあらぬ體にただ一文を鐵鉢に入れた。鐵眼はしみく／＼とその一文

錢に見入つて、雪の上に座した。さうしてほろ／＼涙を流した。

はねをついて遊んでゐた茶屋町の娘の子等は、鐵眼をとりまいて言葉やさしくなぐさめるのであつた。「御出家さん、なぜお泣きなさる。」といふ。「これは涙などお見せ申して面目ない。しかし私はたゞうれしく有難くて泣いてゐるのです。」といふ。「何がうれしくて。」この一文錢が。「それはまたどうして。」お侍様のあとを追つて、やう／＼こゝで追付いて、いただいたのだから。「どこから。」三條の大橋から。「それがなぜそんなにありがたいの。」お前様たちには話してもわかるまいが、私は一切經の開版を思ひ立つて、人々に喜捨を願つてゐる。今日はお正月の二日、喜捨の得はじめにと、三條大橋の西だまりに立つて、はじめてあつたのがこのお侍。この方の一文錢が得られないやうでは、一切經の開版思ひもよらずと、こゝまで追つて、いたゞいて、そのうれしさについ涙をこぼしたやうな譯。」と事の次第を語つてきかすと、娘の子達は目をまるくしてきいてゐた。それから一切經開版の譯などをくはしく聞いて、悉く感心してしまひ、お小遣にとでもらつた小金を、悉く鐵鉢の中に喜捨して、なほも鐵眼の話にきゝとれてゐた。あまり表がさわがしい

ので、さきの侍が出て来て見ると、娘の子達にとりまかれてのこの有様、一切經の開版ときいて、もしか鐵眼禪師ではあるまいかと、試みに尋ねてみると、こはそもいかに、さきに無禮を加へたのは黄檗の鐵眼禪師であつた。武士はさきの非禮を詫び、改めて懐中の紙入を取出し、それを鐵鉢の中に投入しようとした。鐵眼はその手をおしとゞめ、あなたの心からの喜捨はあの一文錢。私はこれを得たので十分です。他日御縁があつて喜捨にあづかるとしても、今日はこれでお別れ申します。と鐵鉢を高くさゞげて、經を讀み、京都をさして歸りました。鐵眼の一文錢とて名高い話だといふことです。が、事實はどうか疑はしい。しかし鐵眼が第一回の資金募集に困難だつたといふ消息は、たとひ針小棒大の話としても、これによつてうかゞふことが出来る。

この課を取扱ふには、鐵眼の深大なる慈悲心とあくまで初一念をひるがへさざる熱心とに着眼すべきである。しかし初一念をひるがへさざる熱心が先行して、深大なる慈悲心はそれに附隨してあらはれて來るのである。なほ鐵眼の一生は他人を救ひ以ておのれを救ふと信じて行動したものでらしい。これを説くのは鐵

眼から事業家のやうなくさみを除くことになり、かたゞ法師としての光を添へるわけになる。

第一時には全文通讀次に題目につきて、一切經とは何、鐵眼のといふ意義——天海のがあり、鐵眼のがあるとも考へられ、鐵眼のは三度目に出來たのだとも考へられる——資金をととのへたこと三回、そのうちいつが最も困難なりしか。事業はどこではじまつたか等考へさせ、第二段に傍線を施したところを書かせ、一代の事業とはあるけれども、事業が目的ではなくて、佛教をひろめ人を救はむがため、資金を募ること數年のその困難、將に出版に着手せんとすとある喜び等、よく考へさせたい。鐵眼にもしもだえといふものがあるとしたら、第一回募集の資金を救助の用にあてるについて、安んずべき一點を求めるときだらうと思ふ。

一切經の出版……………必要の事……………

佛教を盛んにせんが爲……………喜捨を受けたる此の金……………

人を救はんが爲……………更に必要なるに非ずや……………

こゝに歸結するまでの苦心をよく考へさせたい。

歸するところは………にして二にあらざ。

第二時には全文通讀第一時の復習次に第三段第四段に傍線を施したる部分を書かせ、大阪の飢饉の慘狀を補説したい。ある書に鐵眼が多く弟子どもと、三十俵の米を一合づゝ紙につゝんで、施與の準備をしたが、夜を徹して漸く終つた。ところが掌が全部まめになつてこまつたとある。その後錢三文づつを施與することにしたとある。が、人が大勢おしかけて、柵をこはしたともある。鐵眼が町をあるくと、生佛様だといつて、皆合掌禮拜したとある。餘暇が多少あることと思ふから、第一段の一切經とはいかなるもの、當時之を得るにいかん困難であつたかを考へさせたい。

第三時には全文通讀前の復習次に第五段第六段に傍線を施した部分を書かせ、人を救ふたがために佛教を盛んにすることが出来、佛教を盛んにしたが爲に、一切經の刊行がたやすく出来たことを考へさせたい。「強く人々を感動せしめしにや。」喜んで寄附する者意外に多く。「着々として進みたり。」のところをよく考へさせたい。「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」といふに、三度目は一切經となり、一度目二度目は救助となつた。しかし佛教を盛んにするには、その一二度が却

つて一切經より功德が多かつたかも知れぬ。なほ一切經についてのみならず、鐵眼の一生は救濟の一生であるといふのが至當であらう。たゞその事實が一つ一つ明かに傳はらないだけである。

参考 黄檗にいつた時、これだけの櫻の木をどこから得たのでせうか。ときいてみたが、「言ひ傳へもない。」とのことだつた。「説をなす人、吉野山の代官に黄檗の歸依者があつて、枯木だといつては生木をきりたふして送つたなどとも傳へてゐます。」といつてゐた。

原本を隱元禪師からいたゞいたから、出来上つた一切經のお初穂をまづ禪師の前に供へたといふ。それが、今も法堂の中に箱に入れてある。

教材

一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。しかも其の卷數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しむたりき。

今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。一代の事業として(事業家にあらざり)一切經を出版せん事を思ひ立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、廣く各地をめぐりて資金をつのる事數年、(この困難他二回)やうやくにして之をととのふる事を得たり。鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。たま／＼大阪に出水あり。死傷頗る多く家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。(事業家にあらざる所)つらく／＼思ふに、我が一切經の出版を思ひ立ちしは佛敎を盛にせんが爲、佛敎を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。(こゝに立脚し喜捨を見る)喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。(佛敎を盛にする爲)一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。と。すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。(人の死を救ふは佛敎の極意は)

苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。(光風)然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、效果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。(第一回よ)鐵眼の喜知るべきなり。然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、(中頃中止し)人々のくるしみは日々にまさりゆくばかりなり。鐵眼こゝにおいて再び意を決し、(見るに見)喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。(うれし)二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて(元氣百倍)第三回の募集に着手せり。鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附するもの意外に多く、此の度の製版印刷の業着々として進みたり。(本確立)かくて鐵眼が此の大事業を思ひ立ちしより十七年、即ち天和元年に至りて一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられた

り。(大功)これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。此の版木は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に滿ちたり。(これある限)
福田行誠(ぎょうけい)かつて鐵眼の事業を感歎していはく、鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。(三度以上の一切經人知るや否や)

第三章 尋常小學國語讀本 卷十二

第一課 明治天皇御製 (二時間)

この課には明治天皇の御製が十首あつてある。私のやうに天皇の御代に生れ、四十年天皇の治下に人となつたものは、これを拜讀すると、なつかしさが先に立つのである。天皇の御前にゐて、御言葉をうけたまはり、御心にふれ奉るやうな感じがする。この感じを兒童と共にするのが、この課取扱の主眼點かと思ふ。

「古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。」とある第一の御製と、よきを取りあしきを捨てて、とつ國におとらぬ國となすよしもがな。」とある第六の御製とを、あはせ拜讀する時、明治天皇が日夜我が國の上を思召したまひて、安んじたまふ御暇もあらせられぬことがうかゞはれる。第六に「おとらぬ國」と仰せらるゝ所、謙讓の御心が拜察せられてありがたい。第二の「淺綠すみわたりたる大空のひろきを、おのが心ともがな。」と第五の「さし昇る朝日の如くさわやかに、もた

まほしきは心なりけり。」とをあはせ拜讀すると、明治天皇ほどひろくさわやかな御心を持ちたまひても、なほ「心ともがな。」と仰せられ、「もたまほし。」と仰せらるるところに、御修養にいそしませたまふ御心が拜察せられる。第三の「大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。」は天皇がすべてのことにあたらせたまふ御覺悟の程が拜察せられてありがたい。「のぼればの一語よくよく考へなければならぬ。大事の前にも道は存するものを、のぼればといふ一念とぼしくして、道なきを苦しむやうである。明治天皇御一代の御事蹟を拜して、この御製のいかにも深く心にしむのを覺える。第四の御製「ほど／＼に心を盡くす國民のちからをやがてわが力なる。」といふを拜讀しては、我を我と思召しての御ことば、たゞ涙を催さんばかりである。天皇の「わが力」と仰せらるゝは、ほど／＼に心を盡くす國民の力である。國民の力の總合が、天皇の御力であるとは、たゞおそれ多し。我等の力といつても、その實は天皇の御力に率ゐられ奉りてすゝむものなるを。教育勅語に、朕爾臣民と俱に拳々服膺して、皆厥の徳を一にせんことを庶幾ふ。」と仰せらるゝと同じ御心かと拜察し奉る。

第一より第六までの御製は御述懐とも申すべきもの。第七より第十までは四季の風物多かる中に、御心に叶ひたる春夏秋冬各一つをあげたのである。第七の「荒駒を馴らしがてらに野邊遠く、櫻がりするますらをのとも。」を拜讀すると、櫻がりするますらをのとも。」も「荒駒を馴らしがてら」の常を忘れぬをめでさせたまふ御心が拜察せられる。第八の「いづ方に志してか、日盛りのやけたる道を蟻の行くらむ。」を拜讀すると、その務めに忠なる蟻にも、同情の眼をそゝがせたまふことが拜察せられる。第九は「／＼と風のゆくへの見ゆるかな。すゝきはらの秋の夜の月。」には清き秋の月をめでたまひ、第十「海原はみどりに晴れて、濱松のこずゑさやかにふれる白雪。」には白雪のはつきりとふれるをめでたまふのである。坦々たる大道に立ちたまひて、國を思ひたまひ、民をおぼしめしたまふ明治天皇の、常に修養にいそしみたまふ御心にうつる萬象の一切は、かくうるはしく、大きく、はれやかなるものである事を拜察せしめたい。

歌は玩ぶべきものではない。まごゝろの響としてあらはるべきものである。まごゝろそのまゝが歌である。思無邪といふが詩歌一切を通じての心であらう。

明治天皇の御製を拜讀するにも、まづおのが心を邪なきものにして、而して後のことである。申すもおそれ多きことながら、十首は明治天皇の御製にして、ひゞくは拜讀する者の心である。そのひゞきのあとを思ふ時、我等もまたひろく清き心を持ちて君のため、國のために、力の限をつくし、上御一人の大御心を安んじ奉らねばならぬと思ふ。

第一時には十首拜讀、次に前六首が述懐、後四首が四季の各一首であることを考へさせ、前六首を書かせて、第一と第六が國、第二と第五が心、即ち修養、第三がすべてすることに對する明治天皇の御覺悟、第五は我々國民を力とおぼしめすありがたさであることを考へさせたい。和歌は大體の意義さへわかれば詠唱によつて感得せしむべきものだ。

第二時にも十首拜讀、次に前六首の復習、次に四季の四首を書かせ、清くさわやかなる御心に映ずる、うるはしく、大きく、はれやかなるものを感得せしめたい。御製のみならず、いかなる歌でも、之を讀誦する心が純真でなければならぬことも知らせたい。

教材

古のふみ見るたびに思ふかな、

おのが治むる國はいかにと。

淺緑すみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな。

大空にそびえて見ゆるたかねにも、

のぼればのぼる道はありけり。

ほどく心に心を盡くす國民の

ちからぞやがてわが力なる。

さし昇る朝日の如く、さわやかに

もたまほしきは心なりけり。

よきを取りあしきを捨てて、とつ國に

おとらぬ國となすよしもがな。

荒駒を馴らしがてらに、野邊遠く

櫻がりするますらをのとも。

いづ方に志してか、日盛りの

やけたる道を蟻の行くらむ。

はるくと風のゆくへの見ゆるかな、

すゝきがはらの秋の夜の月。

海原はみどりに晴れて、濱松の

こずゑさやかにふれる白雪。

第二課 出雲大社 (三時間)

我が國には神社が多いが、東で伊勢神宮、西で出雲大社は、特に國民の尊崇深きところである。この課は出雲大社参拜の記である。したがつて参拜者の位置が移動してゐる。試みに教材について點を付したる語を見よ。その間に追憶と所見と所感が織りこんである。第一段では、をろち退治の傳説を傍なる人の語るによつて思ひおこし、旅行にはよき日なりは所感。「大鳥居」は所見である。この課中最も大なる追憶は、拜殿の前にぬかづいて、この社の縁起を思ひおこしたるところで、

主として取扱ふところもそこにあるやうだ。社殿の高大を記述したところや、火きりぎね、火きりうすや、稻佐の濱の風光は所感。「なぎさに立ちて昔をしのべば以下は追憶と所感である。かう考へて來ると所見所感は追憶の背景となつて、これをゆたかにするものかと思はれる。之を取扱ふには、第四段の縁起と稻佐の濱の會見とに着眼して、巨人の如く立てる大鳥居や、社殿の高大なるは世人の尊信のなることを示し、火きりうす火きりぎねは出雲大社のむかしを語るものとして取扱ふがよい。

第一時には全文通讀次に作者の動いてゐる部分―點を施したるところ―を考へさせ、それから所見所感追憶の部分の部分を定めて、拜殿の前にぬかづいての追憶を取扱ふがよい。即ち第四段に傍線を施した部分を書かせ、我が國體の上下一心の實は、この會見にあらはれてゐることを知らせたい。

第二時には全文通讀第一時の復習次に第四段以外に傍線を施した部分を書かせ、これによつて第四段の背景を明かにし、特に、そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如し。」を注意して取扱ひたい。こゝを取扱

ふによつて、第四段はさらに鮮明の度を加へるものである。

参考 大國主神

須佐之男尊六世の孫、天冬衣神の子、別名大己貴神、八千戈神、大物主神等嫡妻須勢理姬、庶妻八上姬、出雲の會長たり。後國土を天神に獻じ、杵築に祀らる。醫藥、禁厭、農業の法を創出すといふ。

事代主神 大國主神の子、御母は屋楯比賣神、獵漁を好み、父神を補佐して出雲にをる。

建御雷命 天照太神の命を奉じて、經津主神と共に、中國を鎮む。常陸鹿島神宮の祭神なり。

教材

松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔(出雲文化の發生地)を走ること約四十分、やがて新川を渡り更に進みて斐伊川の鐵橋にかゝる。傍なる人のいふやう、此の川は古の簸川(ひのかわ)にして、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり」と。(古の歴史のあつた地方)

今市を過ぎ、大社驛に着きぬ。停車場の外に出づれば、秋晴の空はあくまですみ

て、暖さ春の如し。(山陰の小春日) 旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、巨人の如く我がゆくてに立つ。七十五尺の大鳥居とは、これなるべし。(崇信の大)

やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にぬかづく。

昔、大國主命賊を平げ民をなつて、威勢四隣に並ぶものなし。(勢大) 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、

「大神の勅にいはいはく、『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』と、快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」

大國主命答へていはく、

「我もとよりのなみ奉る心なし。(勢) 我が子事代主とはかりて答へ申さん。(正) 此の時事代主命はすなどりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、

「かしこし。(胸のすくキ) 仰のまゝに(尊々) たてまつり給へ。」

こゝにおいて大國主命

「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん。(永遠臣下)」

と申して恭しく國土をたてまつりぬ。(ばあつ) 大神其の真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。(たしが) これ即ち出雲大社の起原なり。

此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。千木のほとりを飛ぶ鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね火きりうすといふものあり。太き中指ほどなる細長き棒と、幅四五寸長さ三尺ばかりの厚板となり。此の棒を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。(むかし忘れ)

境内を出でて海岸に到る。稻佐の濱といふ處なり。かの建御雷命が大國主命

と會見せられしは此處なりといふ。(すがくし)折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しいいふばかりなし。(むかうは)なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。(波の語をき)

第三課 チャールス、ダーウィン (二時間)

チャールス、ダーウィンは天才である。その略傳を兒童が讀むのは、天才の前に天才であるかないか未知數の兒童が立つといふことである。相通ふ性質と相反する性質とを反省して、自分はいかなる天分をもつて生れて來たかを自覺せしむるものである。すべて偉人の傳を讀むのは、この心掛が肝要である。偉人崇拜は勿論さうしなければならぬ事だが、反省をしない崇拜は、實におそろしいことだ。チャールス、ダーウィンを取扱ふについても心すべきところだ。

この略傳を讀んで、天才の香のたゞよつてゐるところは、第一段に、一人で楽しん

でゐた。」といふがあり、第二段に、「餘りすばしい生れつきでなかつた。」といふのがある。天才は必ずしもすばしい性質ではない。劣等兒といはるゝ者には、一種の福音である。第三段には、「人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらう。」といふがあり、第四段には、「何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。」といふがある。第五段の「右の手の蟲を口の中へ投込んだ。」といふもそれであり、第六段の「博物學や地質學の實地研究につとめ」といふ所にも見えてゐる。第七段の「あくまでそれにこる性質。」「日常生活は極めて規則正し。」といふのもそれだ。天才は生まれつきでもあるが、興味と共に大なる努力をしまない者である。

チャールス、ダーウィンの一生の仕事は、進化論をまとめたことで、これについてその概略でも知らせることが出來たら、兒童の身邊に存在する生物は、悉く進化の過程にあるもののみで、意義の深いものであることがわかつて來る。それが即ち生物を見る眼が開けるわけで、あらたな研究がそこから起つて來るともいはれる。故にこの課を取扱つては、ダーウィンの生ひたちを知らせ、自分と通ふところを知らせ、天才は天才であると共に、努力をしまないものであることなども考へさせたい。

次に進化論の梗概をも知らせて、生物観察の一隻眼を開きたい。

第一時には全文通讀次にダーウィンの天才らしい所を考へさせて、それを書かせ、よく天賦の才を助長したものだといふことを考へさせたい。三宅雪嶺氏はいつか「人皆天才」といふ意見を發表せられたことがあるが、實にさうだと思ふ。無名の天才がその助長を怠つて、つひに無名に終ることは、をしみても餘りある事だ。

第二時には全文通讀第一時の復習次にダーウィン一代の仕事としての進化論について考へさせたい。これは第一時の終に、兒童身邊の生物について觀察すべきことを命じておかなければならぬ。鶏の産卵數、乳牛の乳の量、豚、蠶等、稻、大根、蕪等について——進化論の要は、すべて生物は或原因により特殊の變化を起すものなるが、これは子孫に遺傳するのみならず、永年月間には、漸々變化の度をますべく、且其の變化は一定の方向あるものにあらざるが故に、たゞ生存競争に最適當なる變化をなせるもののみ繁殖して、遂に一新種を形成するに至るべく、これに反して、生活に適應せざる變化をなせるものは、生存すること能はずして、遂に絶滅に歸す。即ち現今存在せる生物は、皆自然淘汰の結果、生活に最適當なる變化をなせるもののみ

残れるにて、畢竟種の形成は自然淘汰と漸次の變化とによる。」と説くのである。この法則を人の力で生物に適用して、種の變化をはかつたのが人為淘汰である。進化論を説くには、この見易い人為淘汰からはいつて、すべて生物にある力が加はると、變化することを明かにし、それが人の力によるか、自然の力によるかの差であることを考へさせたら、最もわかり易いかと思ふ。動物の保護色、警戒色、保護形など、五年の教材にもあつたし、かたゞ適例である。第八段に傍線を施した部分を書かせ、進化する大意を實例によつて考へさせ、さらに進化せざるものとして、生物を見てゐた學界に、進歩するものだとの説を立てたから、根本に動搖をきたしたのである。

参考

チャールズ、ダーウィンは有名なる英國の博物學者、西曆一八〇九年に生れ、一八八二年に死す。進化論の祖である。エジンバラケンブリッヂ大學に學び、一八三一年より三六年まで、世界一週探検航海に従ひ、歸國後ケントの一村落到退き、専心科學研究につとむ。一八五六年種の起原を著し、又航海中の報告を公にし、爾來病軀を忍び、死に至るまで斯界に貢献す。

教材

チャールズ、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることがすきで、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人楽しんでゐた。(天才の癖 芽見ゆ)

九歳の時始めて學校にはいったが、餘りすばしい生れつきでなかつたので、(天才ならずも敏) 先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。(劣等児の福音) 又父には

「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」

といつて叱られたことがあつた。(叱るまでには父の顔のくもつたのは幾度か)

十歳の頃には昆虫採集を始めた。又いろ／＼の鳥を注意して見ると、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、見れば見る程興味がわき、人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらうと思つて不思議に思ふやうになつた。(天才の所)

父はダーウィンを醫者にしようと思つて大學へやつた。温順な彼は父の命に従

従つて勉強してゐたが、(趣味はいかにと せんがなし) 何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。(天才らしく)

此の頃のことであつた。或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

早速両手に一匹づつつかひと、又一匹變つたのが見えた。これも逃しては大變と、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。(昆虫のみを見てお 投込まれた蟲は

苦しませに恐しく辛い液を出したので、(昆虫も 生懸命) 思はず吐出すと、蟲は得たり

と逃げてしまつた。此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。(ダーウィンは昆虫の武器にまけた)

彼が探検ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、(希望に) 二十三

歳の時である。かくて世界の各地をめぐるつて、歡喜の眼を輝かしながら、(苦を知らず) 博物學や地質學の實地研究につとめ、(實地の 字尊し) 種々の材料を集めて本國に歸つ

たのはそれから五年の後である。此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出來、一生の方針がはつきりときまつた。(一法を窮盡するは 天才の行くべき道)

ダーウィンは興味を覺えると、あくまでそれにこる性質(天才はこれに)で、一度何かをし始めたら、満足な結果を得るまでは決して途中でやめなかつた。しかも日常生活は極めて規則正しく、(天才にはまれに見ること)毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、此の規則正しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽じゆを保つことが出来た。さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。これが有名な進化論で、學界を根本から動かしたものである。(進化のないといふ學説と進化のあるといふ學説、動搖は自然)

第四課 新聞 (二時間)

この課は二つにわけて考へることが出来る。前半は新聞の歴史と、文明の利器

を用ひて、報道を迅速にすることが書いてある。後半はかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるるかを書いてある。前者を一時、後者を一時間として取扱つたがよいと思ふ。勿論第二時間の仕事が手ばることはいふまでもないから、自習にうつして研究させておくがよい。

兒童の生活にも新聞を讀むといふことがある。どこを讀むかといふことからいると、政治記事、經濟記事、社會記事をはじめ、通信、外報、學藝、寫眞、廣告まで、彼等は多少の關係を持つてゐる。――新聞を兒童に讀ませる利害などを議論する人があつるが、私は讀ませてよいと思ふ。眼を開いてやつて、物を見る事を禁じるのが無慈悲ならば、新聞讀むなといふのも無慈悲だ。たゞ讀む態度を常に正しく導かなければならぬ。たとへば政友系の新聞が、民政黨のことを書く場合、宣傳文や廣告の誇張にすぎたるものを見る場合等である。靜かに讀むと、攻撃の極端なところや、廣告の大き過ぎるところは、おのづから異様に感ずるものであるから、落着いて讀む態度を養はなければならぬ。――そこからはいると、編輯局の各部が殆ど自分に關係あるものとなつて、比較的理解が容易である。都市の子供でも新聞社を見

たものは多くはあるまい。まして田舎の子供に之を教へようとしても不可能である。故に兒童の生活に縁のあるところから解いていつて、報道の迅速な現在から、歴史をさかのぼつて考へさせるがよい。即ち新聞を読むといふことから、如何にして作られるかといふに進むが、一つの着眼である。

第一時には全文通讀、次に新聞を読む者を問ひ、日々の新聞を教室にかゝげて讀ますやうにすれば面白い——讀む事項を聞いて、記事の性質のちがふことを考へさせたい。次に第一段と第二段に傍線を施した部分を書かせ、新聞は人情に立脚した印刷物であるから、根ざしの深いところから生れたものであることを知らせたい。最初は單純な遊戯的のものであつたのが、生活に切實なる關係を有するものになつたことを知らせたい。一言にしていへば、文化人の修養機關であると考へさせたい。そこで讀む態度、輕々に讀むことなく、宣傳のあふりに乗ることのないやうに導きたい。ことに攻撃的になる人を惡むよりも、その氣の毒な立場をも考へさせやうにしたい。

第二時には全文通讀、次に第一時の復習、次に第四段第五段第六段第七段に傍線

を施した部分を書かせ、自分等の日々目にふれてゐる記事と、その編輯局各部の關係とを考へさせ、如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝかの問題を解決するやうに仕向けたい。

新聞を讀む態度も、讀本を讀む態度も、別にかはつた態度ではない。政治記事などのやうに、自分の生活に縁遠きものは、他人の痛罵攻撃にのつて、之を惡むやうなことなく、知らぬことを批判するやうな愚をしないことが大切である。自分の生活から想像の出來、批判の出來ることは、たしかに之を行つて、時に師父の批正を仰ぐやうにさせたい。讀方教授は新聞に對しても、かうした態度の持てるやうに導くべきものである。

教材

世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。(新聞紙は根) されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたるしが、印刷術の幼稚なる時代(木版) にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもか